

出光美術館研究紀要第二十八号抜刷  
二〇二三年三月二十五日発行

所謂「珠光茶碗」に関する一考察  
——櫛描文青磁を中心に

徳留大輔



口絵 8 珠光青磁茶碗 同安窯系 中国 南宋時代 出光美術館

# 所謂「珠光茶碗」に関する一考察——櫛描文青磁を中心に

徳留大輔

はじめに

## 一、研究略史

一一一、茶会記研究から紐解かれた珠光茶碗の評価

一一二、「茶会記」や「文献史料」にみる珠光茶碗の造形的特徴

## 二、珠光茶碗・珠光青磁茶碗として伝わる作品に関して

二一一、『雲州藏帳』に記載された珠光茶碗

二一二、この他の「伝世品の珠光茶碗」の作例

二一三、小結

## 三、「伝世品の珠光茶碗」（櫛描文青磁碗）の生産年代と生産地について

三一一、生産地における年代観

三一二、消費地における出土状況と年代観

三一三、生産地に関して

三一四、小結

## 四、江戸時代後半期に珠光茶碗が再度評価された背景

おわりに

はじめに

伝世品の所謂「珠光茶碗」（今日では「珠光青磁茶碗」とも称される）は、茶の湯における侘び茶の始祖とされる珠光（一四三三もしくは三三一—一五〇二）が好んでいた茶碗という伝えに由来するとされている。『大正名器鑑』第六輯には「珠光嘗て賞翫せしに依り、此手の茶碗を珠光青磁と云う」とある。またここで取り上げられている作品は、現在一般的に知られている外面に猫描きとも言われる櫛描文（あるいは櫛目文とも称される）、内面に片切彫りなどの刻花文様と櫛状の点掻文により施文をした作例であり「図一」、出光美術館が所蔵する「珠光青磁茶碗」もその系統にある作例として知られている「口絵」<sup>8</sup>。考古学的な遺跡で確認される陶磁器としては、櫛描文青磁碗や所謂同安窯青磁碗などと称される一群の中に含まれる作例である。その一方で、今日一般に伝世品として知られる「珠光茶碗」「珠光青磁茶碗」の作例（伝世品の珠光茶碗）は、十六世紀代の「古い茶会記に出てくる珠光茶碗」とは特徴が必ずしも一致しているわけではないことも指摘されてきた「註一」。本論では両者ともに触れるが、主に「伝世品の珠光茶碗（珠光青磁茶碗）」、すなわち櫛描文青磁碗に



図1 大正名器鑑に掲載された珠光青磁茶碗（右：見込み、左：高台）

関して考察を進める。具体的には珠光茶碗に関してはその特徴や産地の問題、また江戸時代後期に改めて「珠光（青磁）茶碗」が流行した背景について考察する。その際に同時代に出土・採集された青磁碗、茶の場で用いられた青磁碗や関連するアンティークの茶碗、また江戸時代後期に京都の陶工により行われていた「伝世品の珠光茶碗」の写しによる作例なども視野にいれながら、「珠光茶碗」が再び脚光を浴びた背景について整理を行いたい。なお本論で「伝世品の珠光茶碗」として取り上げる作品の多くは、今日、「珠光青磁茶碗」と称されている作品である。

### 一、研究略史

珠光茶碗に関する研究は、大きく二つの視点があり、一つは茶道史の視点から、もう一つは考古学的な視点からである。考古学的視点からの研究は茶の湯の歴史に関する視点から生じていた疑問点について、遺跡や窯址からの出土品をもとに、珠光茶碗の特徴・産地、年代等について考察が行われてきた。一九八〇年代以降は、日本における遺跡での中国陶磁の出土事例の報告が増えたこともあり、両者の視点を意識する形での研究がより進められている。

それ以前の研究史を振り返ってみると、戦前から少しずつ注目されていたが、江戸時代に確実にその所在が分かる作例がそれほど多くはなく、あまり研究の対象となつてこなかったとも言える。先にあげた『大正名器鑑』第六輯の青磁之部において一点のみであるが珠光青磁として取り上げられている。この茶碗のサイズは、高さ約五・〇センチメートル（二寸六分五厘）、口径が約一二・二センチメートル（四寸二厘）、高台

径は約四・五センチメートル（一寸五分）である。『大正名器鑑』編纂當時は加藤正義が所蔵していた「図1」。かつては京都の医師・長崎昌齋が所持していたとある「註2」。高橋箒庵の実見記によると、「小服にて薄作、内外青鼠色例の如く、外部一面豎に刷毛筋あり高台縁輪状を成し、其内外に白土を見せ、底中央少し凸起の如く、茶溜小さく、其周囲窪めり、口縁に小瘤形の多少疵あるを常とし、（以下略）」とある「註3」。

この珠光（青磁）茶碗に対するイメージは、江戸時代後期頃の珠光茶碗像に影響を受けていると考えられているが、その後もこの理解のあり方は大きな影響を与えてきた。

#### 一―一、茶会記研究から紐解かれた珠光茶碗の評価

珠光茶碗に関する研究は、主に茶会記における記述をもとに行われてきた。そこから分かることは、i) 珠光が嗜好した茶碗とされる珠光茶碗は一点ではなく複数個体あること、ii) 必ずしも斉一性の高い造形的特徴（文様や形が同じである）ではないこと、iii) 天正年間以降、江戸時代の後半になるまで珠光茶碗は茶会記に登場せず、長らく注目されていなかったこと、iv) 「珠光茶碗」に関する評価が、時期により異なる可能性があること（例えば、天文から天正期と江戸時代後半以降での評価）、などが指摘されている「註4」。なお、茶会記に登場する珠光茶碗に関して最も古い記載としては、以前からもよく知られているが『松屋会記』の天文十一年（一五四二）二月七日薩摩屋宗忻の会が初出である。その後天正三年（一五七五）七月二十七日のもすや新太郎の会まで、少なくとも二三回登場している「註5」。また谷氏によると、天正十年（一五八二）から江戸時代中期の明和三年（一七六六）までの約二百八十年あまり、珠光茶碗

は見られず、その後、改めて珠光茶碗（ただしその時の名称は「珠光」「珠光青磁」となっている）が登場することが指摘されている「註6」。iv) に関しては天文から天正期頃、「伝世している珠光（青磁）茶碗」は「善好茶碗」と称されていた可能性があるとの見解も示されている「註7」。

そこでまず作品研究との関わりで、最初にi) ii) の箇所について確認をしておきたい。その後、iii) iv) の部分についても触れてみたい。

#### 一―二、「茶会記」や「文献史料」にみる珠光茶碗の造形的特徴

主に先のii) に関わってくるが、珠光茶碗の造形的特徴を表す記述としてよく知られるのが、『山上宗二記』（「茶碗之事」）「註8」にある記述である。

#### 一 珠光茶碗 惣見院殿御代二火二入失申候。

唐物碗也。ヒシホ（醬）色、ヘラメ廿七在。宗易ヨリ千貫二三好実休へ参候。此類薩摩屋宗忻ヨリ九州筑紫へ参候。此外未二ツ在リ。猶以在口伝。

とあり、その特徴として「ヒシホ（醬）色」で、外面には「篋のような道具を用いて表した二七の線」があったと考えられている。この特徴と共通しながら、さらに器の内側の底に「福」字銘があり、また手取りが重いと記述が永禄九年（一五六六）十二月九日朝、網干屋道琳の茶会の拝見記にも見られる（『天王寺屋会記』津田宗及他会記 拝見記）。また永禄十年（一五六七）二月十七日朝の万代屋了二の茶会（『天王寺屋会記』津田宗及他会記 拝見記）に見られる。これらが珠光茶碗の茶会記などか

ら分かる造形的特徴として、今日でも共通した理解となっている。また i) と関連することであるが、珠光茶碗に関しては少なくとも天文十三年(一五四四)以降、利休の茶会においても度々使用されているほか、武野紹鷗、納屋宗久、実休などが所持していたことが知られている。このことは i) にあるような特徴を有するものが少なくとも天文から天正年間には珠光茶碗の特徴であったことを物語っている。

但し、先行研究でも指摘されているように、この三つの造形的特徴〔ヒシホ色〕(篋目が二七本もしくは二六本)(内底に「福」字銘)をすべて一つの茶碗として備えている作例は、「伝世品の珠光茶碗」には現在のところない。

ところで茶会記ではなく、また時期は十八世紀代とくだるが珠光茶碗に関して、文献の記述と伝世する作品との対応関係が分かるものとして、松江藩主であった松平不昧(一七五二—一八一八)の『雲州蔵帳』に記載される二点の伝世する作品が知られる。このうち「銘 遅桜」(根津美術館蔵)は「伝世品の珠光茶碗」の典型的な作例である。そこで次に珠光茶碗、珠光青磁茶碗として知られる外面の櫛描文が特徴的な作品について見てみる。

なお iv) に関しては、使用される場面についても興味深い指摘がある。それは、薩摩屋宗忻は薄茶碗(「松屋久政茶会記」天文十一年四月七日)、納屋宗久は「大黒庵の天目」とともに紹鷗が所持していた珠光茶碗を茶筌台として(「松屋久松茶会記」永禄二年(一五五九)四月十九日朝)、もすや新太郎の会(「宗及他會記」天正三年七月二十七日晩)では濃茶碗として利用している。若干の時期差はあるが天文から天正年間においても珠光茶碗に対しての位置づけや使用の仕方は一様ではないようである。江戸時代

以降の評価の様相に関しては後述する。

## 二、珠光茶碗・珠光青磁茶碗として伝わる作品に関して

### 二―一、『雲州蔵帳』に記載された珠光茶碗

『雲州蔵帳』に取り上げられている不昧が所持していた二点の茶碗とは、「上之部」の「茶碗之部」に記載されている「銘 遅桜」(根津美術館蔵)、「銘 早苗」(逸翁美術館蔵)である。いずれも珠光と記載があり、珠光茶碗あるいは珠光青磁との表記はない〔図2〕。

「珠光青磁茶碗 銘 遅桜」(根津美術館蔵、以下、「銘 遅桜」と略す)〔図3〕は、淡い朽葉色の釉色で、高台と高台周辺は土見せとなっていて、全体に粗略の作振りとも評される〔註9〕。

内面には彫文と櫛状の点掻文を粗く施し、外側面には櫛描きによる櫛目を七本加え、淡茶色の釉が腰までかけられる。口縁下の内側面には一本の刻線がまわる。見込みにははつきりと茶溜まりがつけられている。またこの茶碗の内側の口縁直下に褐色の茶渋のようなしみがつく。外側にも同じようについていて、釉内に入るしみであるので、松平不昧が目にする江戸時代後期以前は、何からかの形で土中に埋蔵されていた可能性が西田氏により指摘されている〔註10〕。なお、根津美術館では現在、福建の莆田窯産の可能性を想定されている〔註11〕。

もう一点は「珠光青磁茶碗 銘 早苗」(逸翁美術館蔵)である〔図4〕。この作品は一般に知られる珠光茶碗とその姿を異にし、畳付きから直線的に立ち上がり、高台脇から腰にかけてゆつくりと張り、口縁に向かつて外に広がる。内側面には片切彫りで雲文と思われる文様を施し、さら

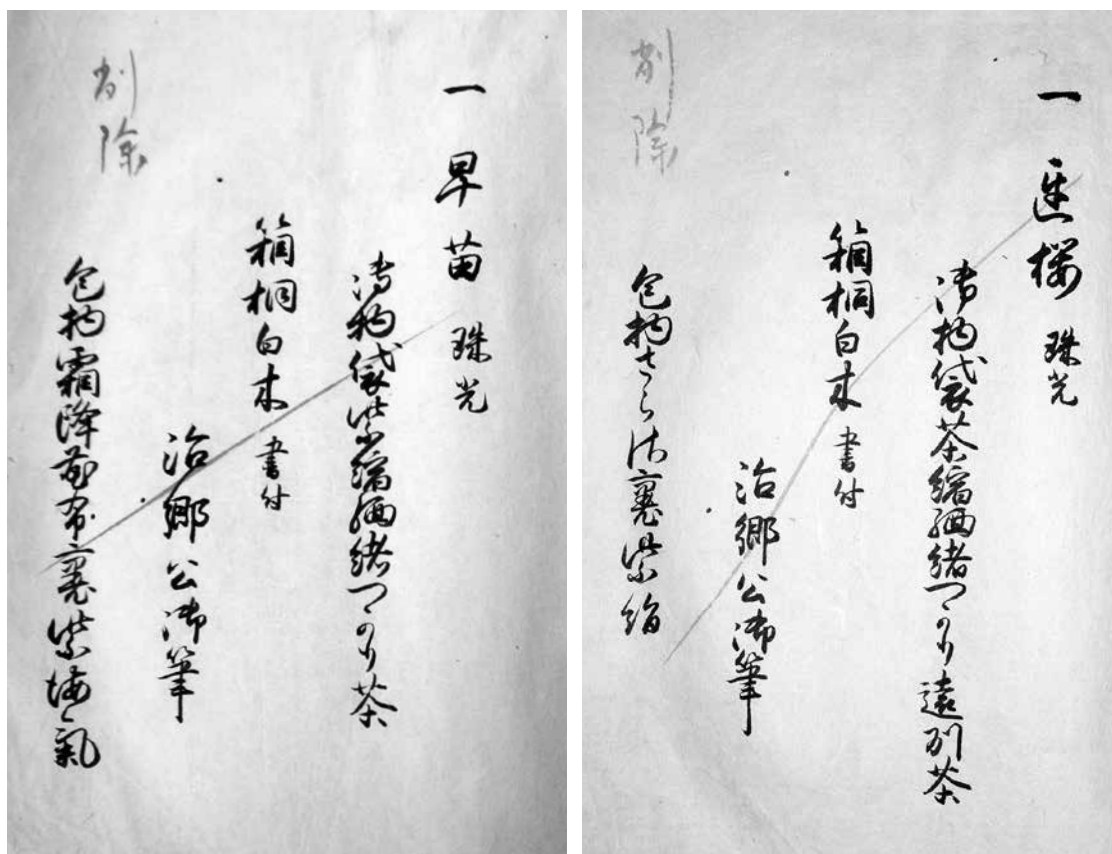


図2 『雲州蔵帳（御茶器帳）』（出光美術館蔵）に記載される「珠光」茶碗（右：遅桜、左：早苗、いずれも部分）

に楠描きにより文様を上下に散らしている。なお銘の「早苗」は、この様子が田の早苗に似ているところからついた可能性が指摘されている。外面には、ぎつくりと片切彫りにより蓮弁文が一周めぐり、さらにそれぞれ蓮弁文には見込みに見られるような楠描きが縦方向に施されている。黄褐色を呈する青磁釉は内面と外面高台脇までかけられており、胎土はややねっとりした質感で茶褐色を呈する。内面には楕円の点掻文は見られず、「銘 遅桜」とは器形もまた胎土の質感も異なっている。こちらにも「銘 遅桜」と同じく福建産の閩江流域の窯で焼造された可能性が想定されるが、生産年代は器形や文様の構成から十二世紀代と考えられ、「銘 遅桜」よりもやや時期的に遡る。

以上、松平不昧が所持していたこの二点は、釉調はたしかに淡い朽葉色を呈しており、外面に刻線による模様は見られるが、現代的な視点で見るとそのフォルムや内面の文様は視覚的に異なるカテゴリーのものであると認識される。しかし『雲州蔵帳』「上之部」の茶碗之部にいずれも「珠光」として分類されている。少なくとも十八世紀後半から十九世紀初頭頃にかけては、「珠光茶碗」のイメージは割と緩やかに捉えられていたのではないかとも思われる〔註12〕。このことは、天文から天正年間茶会記で登場した珠光茶碗が、長らく茶会で登場しないことから、「珠光茶碗」がいったいどのようなものであったのか曖昧になっていたことが要因となったものと思われる。またこのことは後に蜷川式胤に関するところで簡単に触れるが、江戸時代後期から明治時代にかけて珠光茶碗の写しが国内で作られるが、そこにも影響を与えたものと思われる。

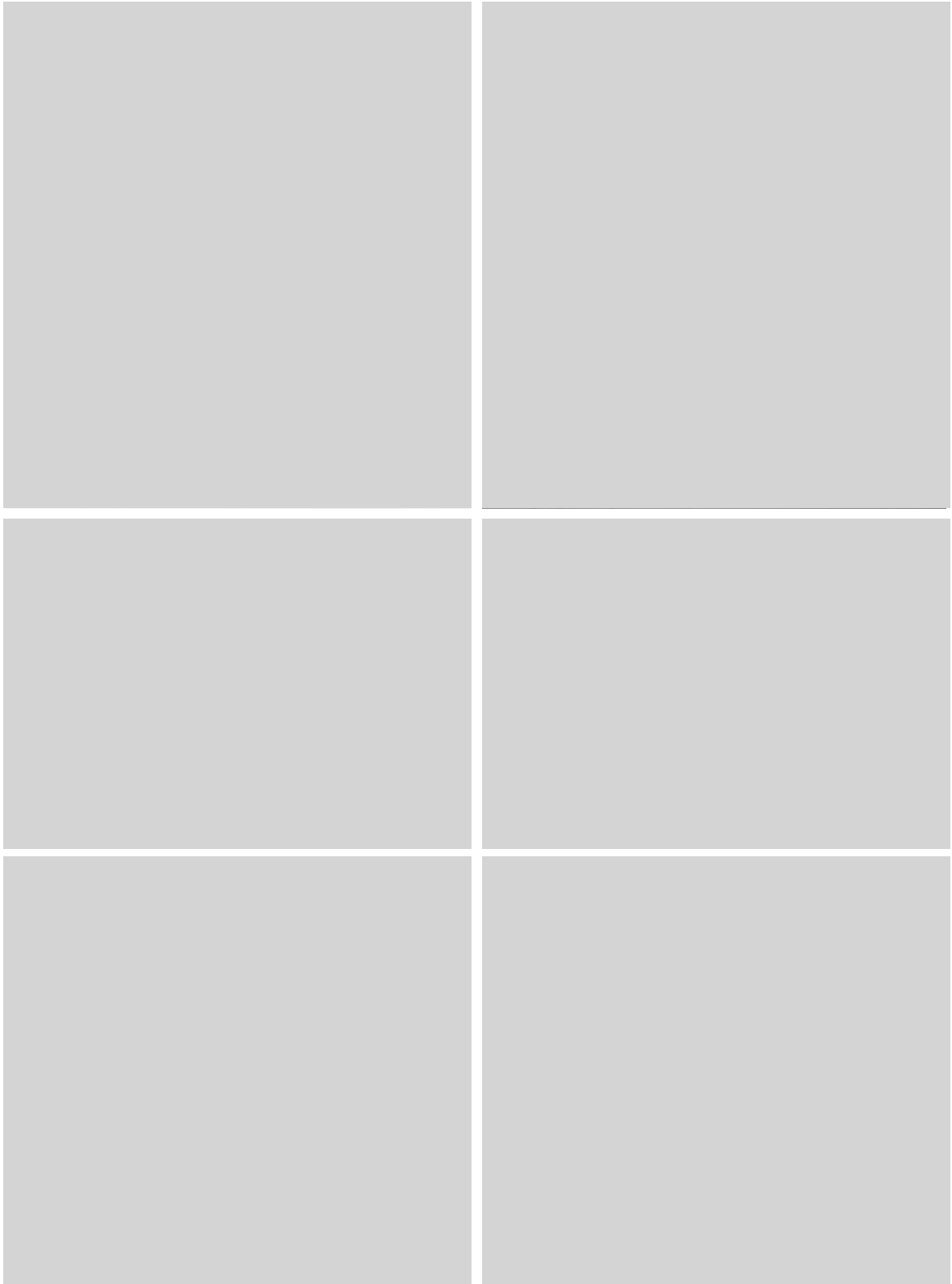


図4 珠光青磁茶盃 銘 早苗 龍泉窯系  
中国 南宋時代 逸翁美術館  
高 6.2cm、口径 13.2cm、高台径 4.7cm、重量 280.7g  
(上：見込み、中：姿、下：高台)

図3 珠光青磁茶碗 銘 遅桜  
中国 南宋時代 根津美術館  
高 6.5cm、口径 15.5cm、高台径 4.3cm、重量 259.8g  
(上：見込み、中：姿、下：高台)



## 二二、この他の「伝世品の珠光茶碗」の作例

先述したように伝世の過程が明らかであったり、古くから知られたりする珠光茶碗（珠光青磁茶碗と称されるものも含む）はあまり多くはない。なお本節で取り上げるように伝世品として知られる作例の多くは、「銘遅桜」に類似する。以下、所持していた人物の社会的な属性に着目しながら江戸時代にまでにその作品の存在が確認できるものを中心に見ておきたい。なお茶碗の所持者は時期により異なっていた可能性もあるが、現状分かる範囲で判断しておきたい。

### 大名・武家関連

尾張藩徳川家に伝来した「銘 翁」「銘 荷葉」〔註13〕（いずれも徳川美術館蔵、長州藩毛利家の所蔵品（毛利博物館蔵）などがある。この他、江戸時代にまで所蔵が遡るかについては判然とせず、また外面の櫛描文の有無がはっきりと分からないが、売立目録の中に松花堂箱書とされる肥前松浦伯爵家旧蔵のものがある（『松浦伯爵家蔵品入札』昭和六年（一九三二）十月二十六日）。

尾張徳川家に伝来した「銘 翁」は、やや灰白色を呈する釉色で、裾から高台脇と高台内にかけて露胎であり、高台内は兜巾状になっている。外側面には櫛目が一〇から一六本が一単位となる櫛描文が一周巡り、内面には際をはつきりと区切った底部、内側面には簡略化された刻花文および「之」字状に櫛状の点掻文が配されている〔図5〕。また本作品が収納される内箱蓋表の「翁」の箱書は、小堀宗中（一七八六—一八六七）によるという。尾張徳川家の蔵帳によると、元禄二年（二六八九）上御数寄御道具・中御数寄道具帳に記載（一 同（御茶碗） 同（御薄茶々碗） 河

内 同（高麗）一）されているとある。

「銘 荷葉」〔図6〕は、口縁部がやや外反して窄まる齧口が特徴的である。外面は篋で片切彫り風に弓状に沈線を一四本縦方向に配し、内面は無文。内底は二重に大きく際をとり茶溜りとなっている。文様がかなり簡略化され、器内面の余白も多いことを考えると、後述する出光美術館蔵の珠光茶碗のタイプよりは時期がややくだると思われる〔註14〕。ただし高台裏は丁寧に平たく作り出されており、伝世品の珠光茶碗としては珍しい。器に施された釉薬はかせており、貫入のところどころに茶色のしみが入り込んでいることから、「銘 遅桜」（根津美術館蔵）のように土中痕の可能性がある〔註15〕。なお本作品は、尾張徳川家の蔵帳（名古屋御数寄屋方御道具帳）によると、天保十四年（一八四三）に尾張家十二代斉荘の江戸の「御側御道具」とされ、嘉永元年（一八四八）に国許へ戻されたとされている。

### 寺社関係

出光美術館が所蔵する珠光茶碗（所蔵品としては珠光青磁茶碗としている）は、この作品を収納する箱の蓋裏に貼紙白文方印で「本願寺蔵」とあり、かつて本願寺に伝来していたと伝わっている〔図7・口絵8〕〔註16〕。

本作品は、ロクロ成形による穏やかな造形を見せ、口縁に向かって大きく開きながら端部にかけて直口気味に立ち上がり、見込みは平坦に、また際もしつかりと作られ茶溜りとなっている。内側面には勢いのある片切彫りと櫛状の点掻文によって、かなり意匠化された花卉文が大胆に三方に配されている。また外面には一単位一四本の櫛目文が配されている。淡い朽葉色を呈する釉は高台を残し、やや無造作に浸しげけされて

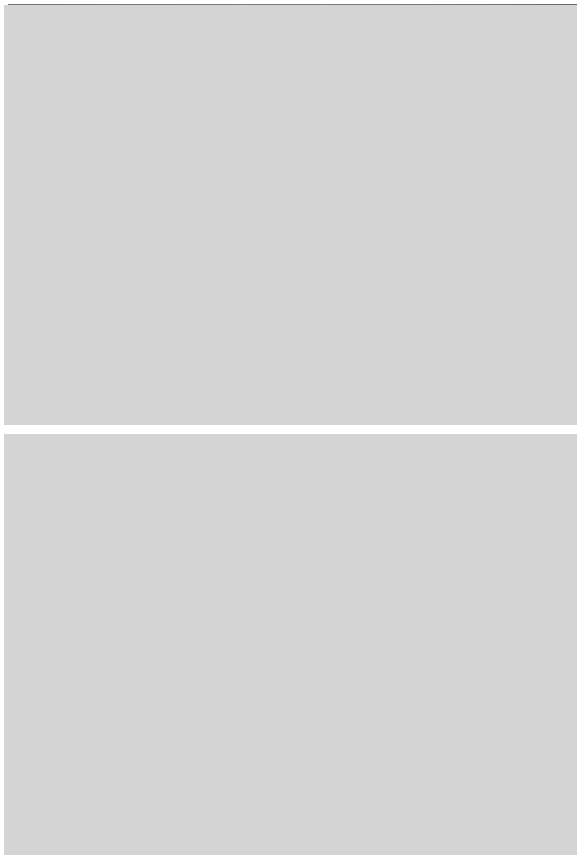


図6 珠光青磁茶碗 銘 荷葉 中国 南宋時代  
徳川美術館 © 徳川美術館イメージアーカイブ /DNPartcom  
高 6.4cm、口径 15.6cm、高台径 5.5cm、重量 290.0g  
(上：姿、下：高台)

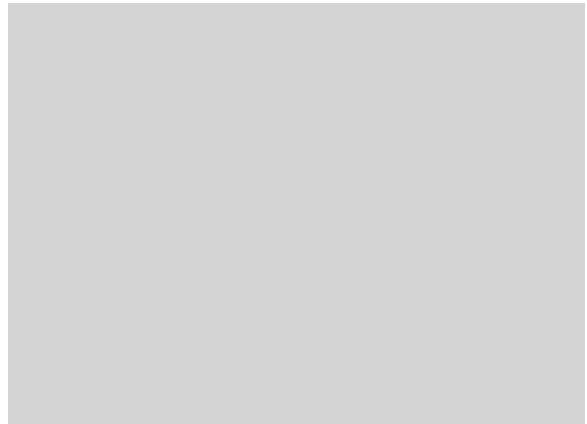
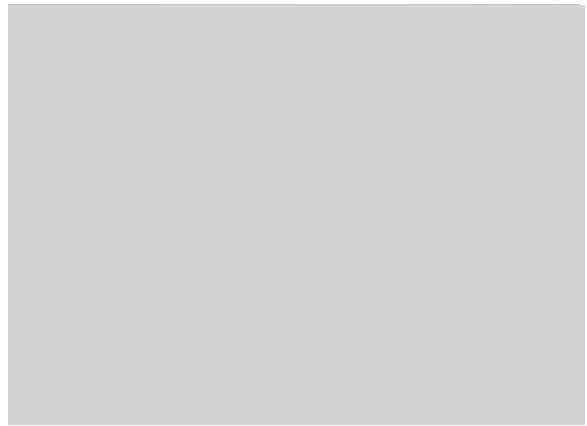
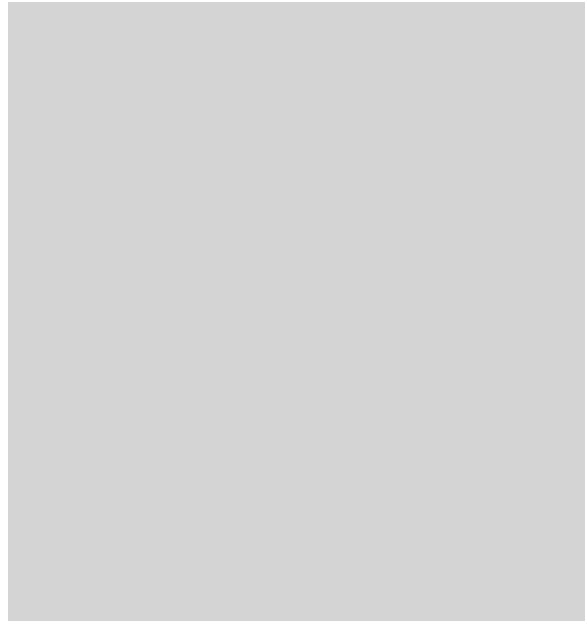


図5 珠光青磁茶碗 銘 翁 中国 南宋時代  
徳川美術館 © 徳川美術館イメージアーカイブ /DNPartcom  
高 6.7cm、口径 15.6-16.1cm、高台径 5.3cm、重量 284.0g  
(上：見込み、中：姿、下：高台)



図7 珠光青磁茶碗 中国 南宋時代 出光美術館  
高7.0cm、口径15.8cm、高台径4.9cm、重量325.6g  
(上：見込み、右中：姿、左中：見込み・姿、右下：高台、左下：箱貼紙)

いる。無釉の露胎部に見られる胎土は、きめの細かい粘りのある土で、磁化して灰白色に堅く焼きしまっている。所謂櫛描文青磁で「伝世品の珠光茶碗」の代表的な作行きであるが、竹内氏が指摘するように、口径に対して器高の比率が高く、やや深みのある器形である特徴をしている【註17】。

また寺社に関連する作品としては、藤田美術館が所蔵する「銘 青簾」が知られる【図8】。器の内面には抽象的な刻花文が描かれ、外面には櫛描文が一周配されている。やや小振りな作品の一つである。本作品が収納されている箱書から、寛保三年（一七四三）四月に勅命によって醍醐三宝院の門跡となった、九条輔実（一六六九—一七三〇）の子の松山堯山が所持し、「青簾」と命銘していることが知られている【註18】。

この他、外面の櫛描文がかなり細く、また彫りが浅くなっていて全体に文様が簡略化された感じがあるが、器形としては三井記念美術館所蔵の「銘 波瀾」【図10】に類似する茶碗が、奈良の称名寺に所蔵されている【註19】。筆者は実見したことはないが、カラー図版を見る限りでは少し土錆ではないかと思われるようなしみが表面に見受けられる。

#### 茶家関係

野村美術館が所蔵する「珠光青磁茶碗 銘 初花」【図9】【註20】は、器高五・五センチメートル、口径一三・〇センチメートルとやや小振りで、医家として知られる京都福井家伝来（個人蔵）【註21】とサイズ感が類似する。黄緑味を帯びた釉薬は器の内面および外面の胴下から高台付近まで施され、高台から底裏は無釉で露胎となっている。高台裏は他の作例同様に兜巾状になっている。露胎からのぞく胎土はやや白みがかった

た褐色を呈する。なお本作品は明治頃まで藪内燕庵に伝来していたように、銘の「初花」は十代休々斎竹翠（一八四〇—一九一七）による【註22】。

#### 商家関係

三井記念美術館が所蔵する「珠光青磁茶碗 銘 波瀾」【図10】は、新町三井家旧蔵で、内箱の蓋裏には表千家九代の了々斎（一七七五—一八二五）により「珠光青磁茶碗 銘波瀾ト号了々（花押）」と箱書き（墨書）されている。

器形は出光美術館のそれに類似し、内側面には口縁下に圏線を巡らし、その下に刻花文と櫛状の点掻きによる之字点列文を配す。内底には大きめの茶溜りを設ける。外面には一周放射状に櫛描文が見られ、外底は兜巾状に仕上げる。朽葉色を呈する釉薬は内面および外面の高台付け根から腰付近まで施され、高台ならびに外底は無釉で露胎である。胎土の雰囲気も出光美術館所蔵のそれに類似する。清水氏によると、この茶碗は新町三井家からの寄贈リストに掲載されたもので、新町三井家の元文年間（一七三六—四一）の道具帳「元文道具帳」（未確認）に記載されていたようである。なお三井記念美術館には北三井家旧蔵で表千家十一代の碌々斎（一八三七—一九一〇）箱書による珠光青磁茶碗が所蔵されている【註23】。

#### その他、注目される作品

この他、いくつか古くから伝わっていた可能性があると思われる作品、また近代以降に改めて見いだされた可能性もあるが興味深い作例について数点取り上げておきたい。

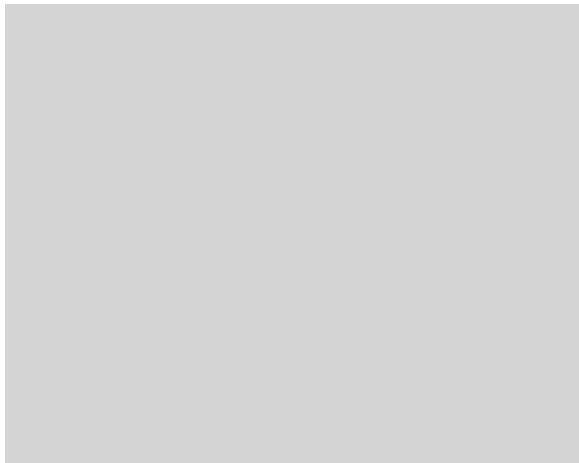


図8 珠光青磁茶碗 銘 青簾 中国 南宋時代 藤田美術館  
高 5.6cm、口径 13.0cm、高台径 4.0cm  
(右：姿、左：高台)

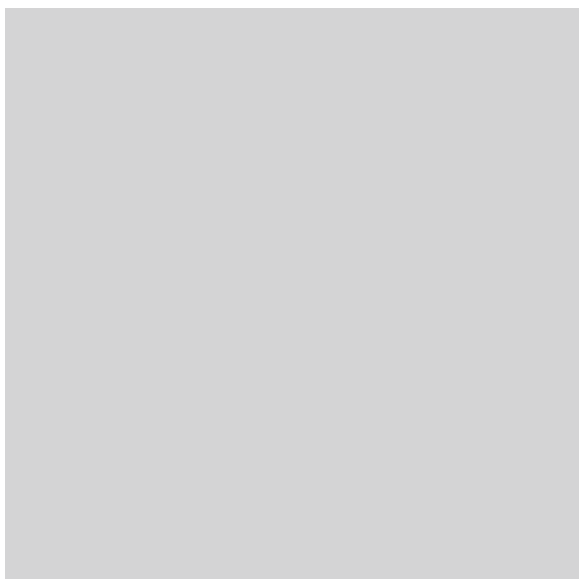
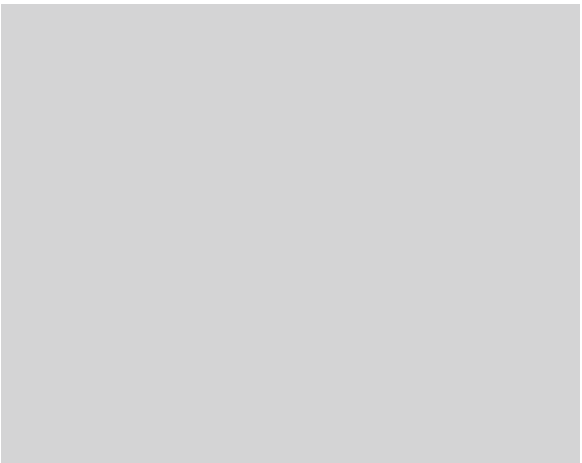


図9 珠光青磁茶碗 銘 初花 中国 南宋時代 野村美術館  
高 5.5cm、口径 13.0cm、高台径 4.3cm、重量 197.6g  
(右：姿、左：高台)

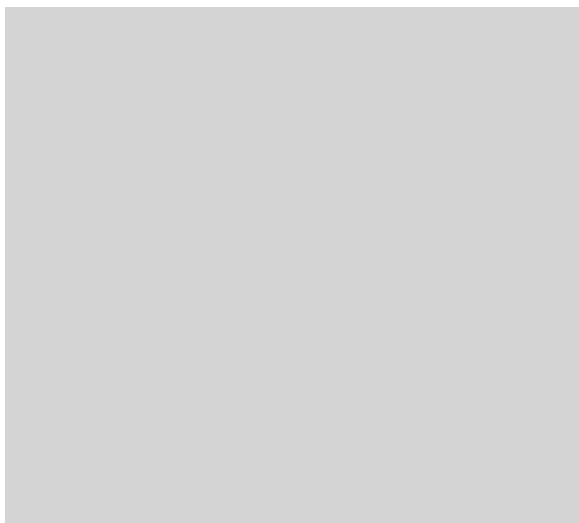
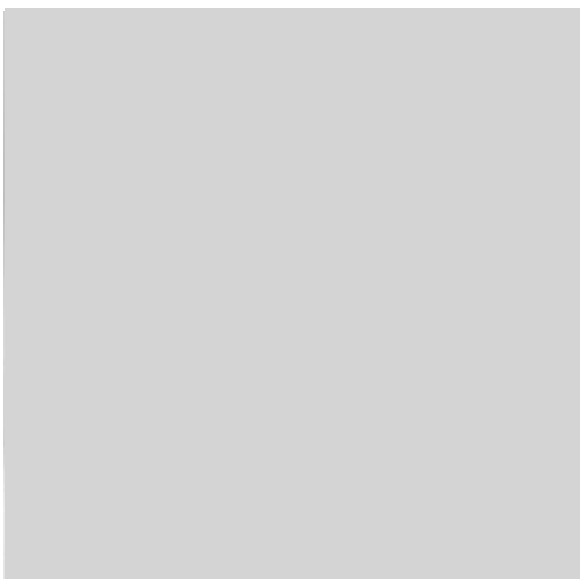
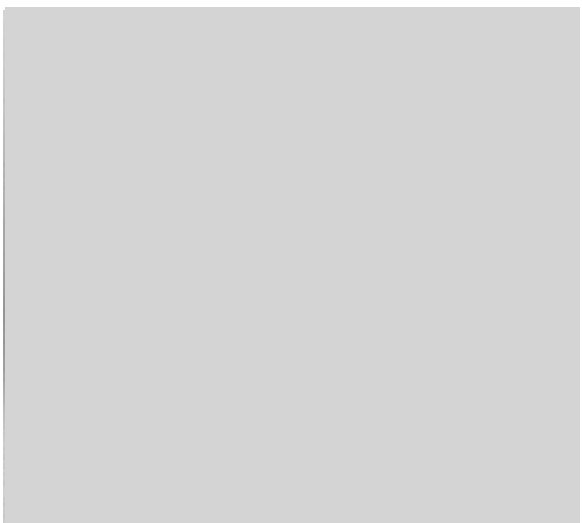


図10 珠光青磁茶碗 銘 波瀾 中国 南宋時代 三井記念美術館  
高 7.0cm、口径 16.0cm、高台径 5.0cm、重量 360.5g  
(右：姿、左：高台)



徳島市徳島城博物館所蔵の珠光青磁茶碗は、坂東宗稜（二代目坂東嘉太郎、一八八九—一九六八）旧蔵である〔註24〕。筆者は実見していないが、土見せの雰囲気などは図録などで見る限りは出光美術館所蔵作品とも類似する。なお、塗箱の蓋表は金銀粉字形「珠光青磁茶碗」とある。「辛未」（昭和六年）の古筆了任の極書があり、幕府普請奉行を務め、茶人としても知られた船越伊予守永景（一五九七—一六七〇）の筆とされる。なお坂東商店は呉服屋で、明治十三年（一八八〇）頃創業である。

この他、東京国立博物館（以下、東博と略す）の二点の珠光茶碗を取り上げておきたい。

一点目は東博の記録によると大正三年（一九一四）に購入した作品「青磁刻花花文碗」（TG426）である〔図11〕。本作品を収納する箱の蓋表には「珠光青瓷碗」と墨書きされているが、江戸時代まで遡る箱ではなさそうである。本作品は口縁部がわずかに内湾する平茶碗タイプで、口縁部に欠けた箇所があるが金継ぎが施されている。高台裏は兜巾状になり、左回転のロクロにより削りを行っている。器の外面には高台から放射状に櫛描文が配される。内面には口縁下に沈線が施され、内壁には片切彫りで簡略化された草花文が表され、さらに櫛状の点掻きによる之字点列文も施される。内底は一周しっかりと刻み込んでいて茶溜まりが作られている。

二点目は、口縁部がわずかに内湾するタイプで素直な形の平茶碗に位置づけられるフォルムの碗（TG432）である〔図12〕。欠けた箇所には金継ぎが施される。口縁下の内壁にはやはり一周沈線が巡り、片切彫りにより簡略化された草花文、またその上から之字点列文をおおよそ均等に六箇所配している。内底の茶溜まりはしっかりと設けられている。外面

には櫛描文が七箇所、弧を描くように配されている。

これら二点の共通する特徴としては、いずれも高台脇まで施釉がなされず、高台脇から高台裏にかけては無釉で露胎であり、灰白色を呈する点である。中でも珠光青磁碗（TG432）は高台畳付の作りも粗く、幅広であり、さらには焼台の痕跡も見られる。釉色は本来もう少し黄味を帯びていると思われるが、全体的に白濁した灰色を呈している。またいずれも器の内外面ともに刻花や櫛目部分に土鏽のような痕跡が見られ、おそらくこれが見た目の色合いに影響を与えていると思われる。雰囲気としては、徳川美術館の「銘 荷葉」にも近い表面の色味を感じさせる。この二点はいつの段階に土中から発掘されたものか不明であるが、西田氏が「銘 遅桜」で指摘されるような、今日までに残る珠光（青磁）茶碗の中には、近世（あるいは近代）期に土中から発掘されたものも少なくないのではないかと思わせる作品である。

## 二―三、小結

本章では主に江戸時代にまでその伝来が遡る、あるいはそれが想定される作品を中心にその特徴を見てきた。まだ十分には集成ができていないこともあるが、先述したが、先行研究でも指摘されてきているように、三つの造形的特徴、①「ヒシホ色」、②篋目が二七本もしくは二六本、③内底に「福」字銘のすべてを一つの茶碗として備えている珠光青磁として伝世している作例のものは現在のところ見いだされていない。とくに内底に「福」字銘を有する作例については、外面に櫛描文を有する所謂「伝世品の珠光茶碗」のタイプには見られない。

なお作例で見ると、「伝世品の珠光茶碗」としては特殊な器形である

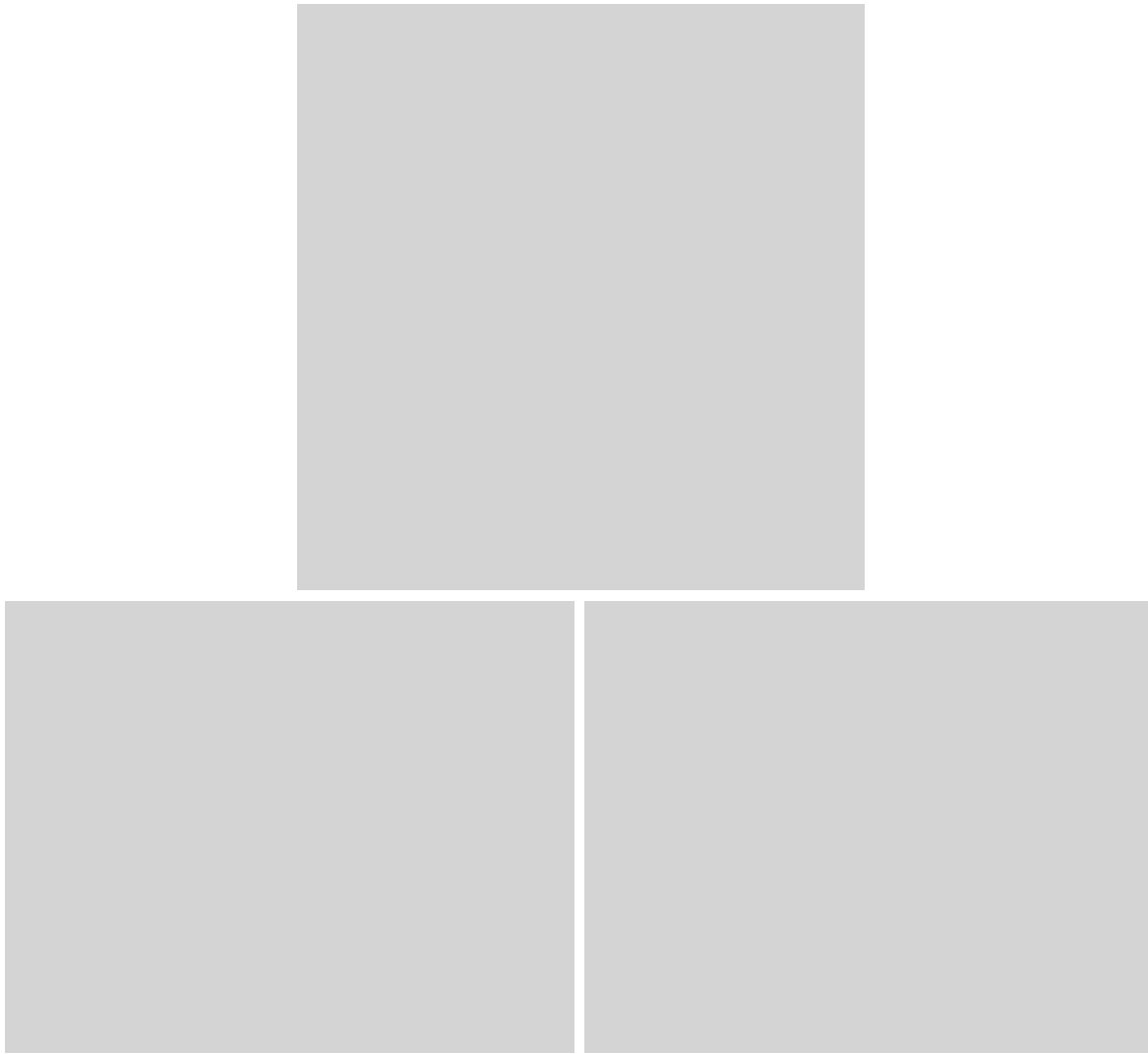


図 11 珠光青磁碗（青磁刻花花文碗） 中国 南宋時代 東京国立博物館（TG-426）  
高 6.8cm、口径 16.3cm、高台径 5.0cm、重量 359.6g  
（上：見込み、右下：姿、左下：高台）

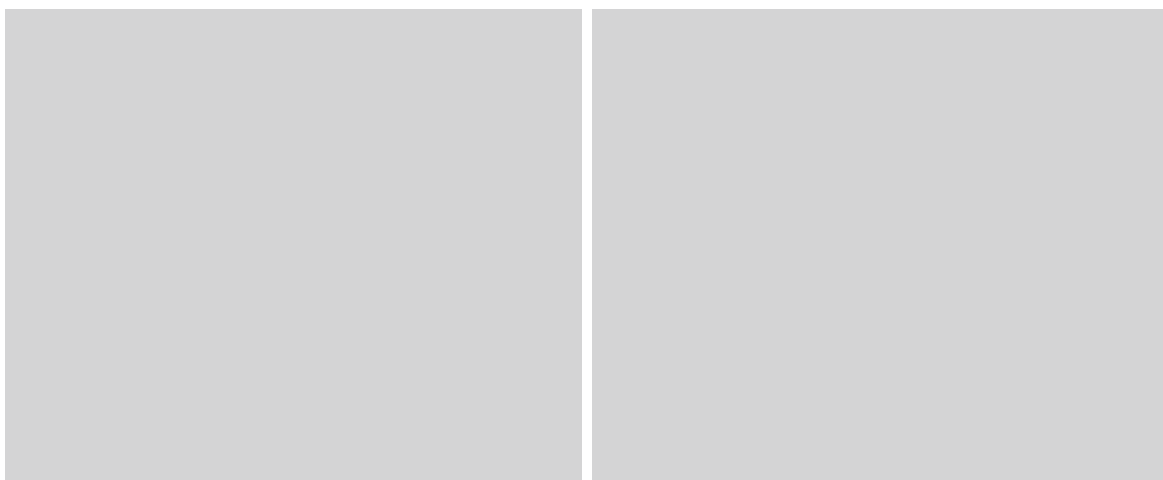


図 12 珠光青磁碗 中国 南宋時代 東京国立博物館蔵（TG-431）  
高 7.0cm、口径 16.6 cm、高台径 5.2 cm、重量 303.4g  
（右：姿、左：高台）

「銘 早苗」をのぞくと、大名、寺社、茶家、商家などの社会的属性の違いにより、作行きに顕著な違いは認められない。数が少ないため、今回は細かく分類は行っていないが、刻花文や之字点列文、外面の櫛描文が明瞭に見られるタイプとそれらが簡略化されているタイプの二タイプがあることが分かる。またサイズにもある程度特徴がある。図13は青磁碗のサイズを比較したものである(附表・一九一頁)。横軸は口径、縦軸は高さを示している。▲は「珠光茶碗 銘 早苗」、■はそれ以外の櫛描文を施した所謂「伝世品の珠光茶碗」である。また比較のために□は「銘 馬蝗絆」「銘 鏝」などを含む青磁輪花碗、×は外面に刻花により蓮弁文を施す碗、◇は所謂人形手と称される、内面に印花で人物文などを施す碗について法量を示した。この図を見ると、■の櫛描文タイプの珠光茶碗は、大形のグループ(口径一五・〇〜一七・〇センチメートル、高さ六・五〜七・〇センチメートル前後)と小形のグループ(口径一三・〇センチメートル前後、高さ五・五センチメートル前後)がある。余談であるが、輪花碗や人形手茶碗もその範囲はそれぞれ異なるものの、ある程度大小のサイズの違いがある。また蓮弁文碗(×)もサイズヴァリエーションがあるが、その幅は珠光茶碗と比べると広い傾向にある。珠光茶碗は後述するように、十二〜十三世紀前半に日本に数多く舶来している櫛描文青磁の中から、茶碗として適当なサイズで、かつ大小異なるサイズのものが選ばれていったものと思われる。

またやはり数量が少ないため、今後さらなる検討が必要となるが、大形のものには武家や寺社に所蔵されるものに多い傾向がある。なお伝世品の珠光茶碗には、近世期頃に土中から発掘された可能性がある作品が「銘 遅桜」以外にも存在することを確認できた。

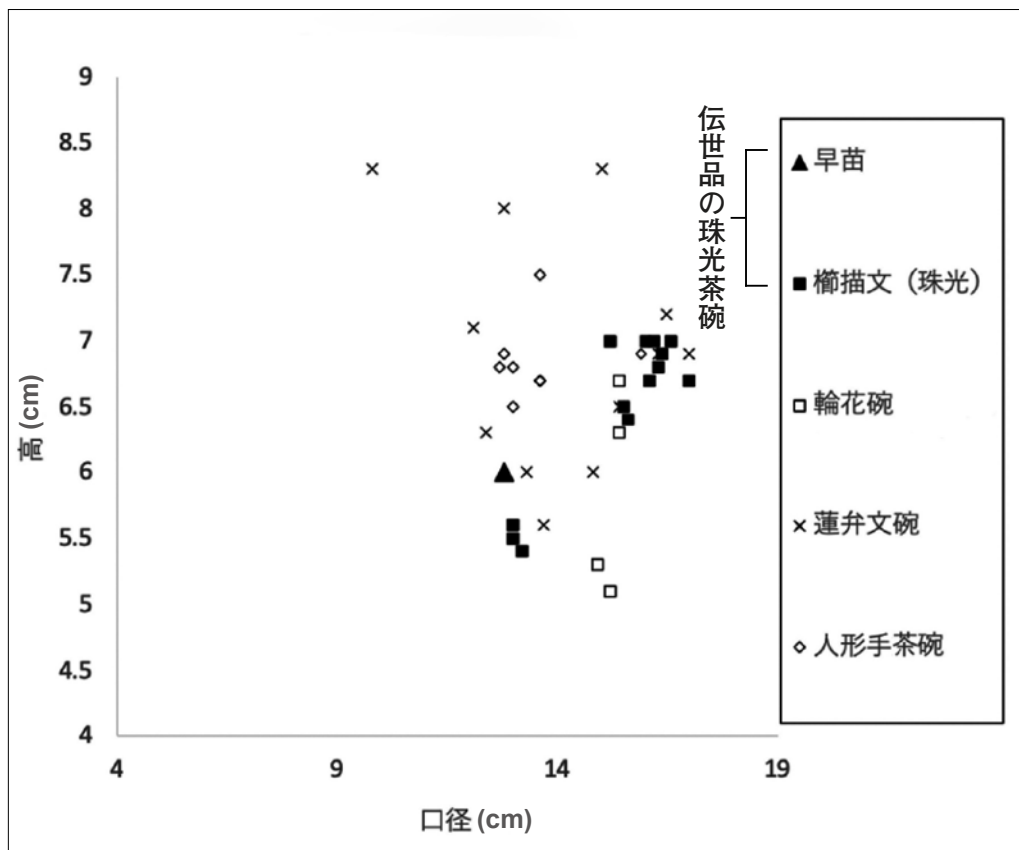


図13 伝世品の珠光茶碗と伝世品の龍泉窯青磁(茶)碗の法量



### 三、「伝世品の珠光茶碗」（櫛描文青磁碗）の 生産年代と生産地について

「伝世品の珠光茶碗」の特徴を考古学の出土資料とあわせて考えると、櫛描文青磁碗に分類される。つまり外面には猫が爪でひっかいたような櫛描文様、内面には片切彫りによる草花文、また櫛状の点掻きによる「之」字点列文が施され、釉色はやや黄色味を帯びているものが多いのが特徴である。一部やや青緑味を帯びている作例もある。このタイプの青磁碗は、茶会記の珠光茶碗の特徴にある内底に「福」字銘は見られない。また外面の櫛描文の数も二六本や二七本ではないものが一般的であることは先述した通りである。

先行研究を少し古くまで遡っておくと、櫛描文青磁の生産年代は、福岡県の太宰府付近、福岡湾底をはじめ、鎌倉海岸、福山の草戸庄など、鎌倉時代の遺跡から出土することから、おおよそ中国の南宋時代に相当するであろうことは古くから指摘されてきた<sup>〔註25〕</sup>。産地に関しては昭和五年（一九三〇）に小内山康夫氏が浙江省徳清窯の窯址を発見した際に、櫛描文青磁の破片を採集したことから、小山富士夫氏が『支那青磁史稿』で、珠光青磁を徳清窯と比定しているが<sup>〔註26〕</sup>、その後、一旦それについては取り消している<sup>〔註27〕</sup>。

現在では、これら櫛描文青磁碗（考古学の遺跡出土例としては、大宰府分類で龍泉・同安窯系青磁0類と称されるタイプや同安窯系青磁と分類されてきたもの<sup>〔註28〕</sup>は、中国浙江省龍泉窯（例えば龍泉市の中でも南区と称される金村窯址や東区と称される大白岸村西金鐘湾窯址、山頭窯五号窯址など）<sup>〔註29〕</sup>や福建地域のほぼ全域で焼造されたことが分かっている。その櫛描文青磁

は当時の大陸への支関口であった博多（福岡市）をはじめ、京都<sup>〔註30〕</sup>、鎌倉、平泉など列島各地に流通している。

#### 三―一、生産地における年代観

櫛描文青磁碗や皿の生産年代に関しては、おおよそ北宋晩期から南宋期、つまり十一世紀後半から十三世紀代が考えられている。龍泉東区においては、主に北宋晩期が中心で、釉層の厚さは比較的均等で、釉には艶があり、多くの器物には一定のガラス感が見られる<sup>〔註31〕</sup>。また龍泉窯の中心的地域である南区に所在する金村窯址においては北宋晩期から南宋早期に櫛描文青磁碗が焼造されていたことが確認できる<sup>〔図14〕</sup><sup>〔註32〕</sup>。金村窯の出土品は全体に精緻で丁寧な作りのものが多く淡い青緑色の釉葉の青磁が多いが、その中にも酸火焰気味に焼成され、黄褐色・朽葉色のような釉色の製品も見られる。ただしここで見られるような高台畳付の脇まで丁寧に施釉しているものは「伝世品の珠光茶碗」には見られない。

龍泉地域の周辺である福建地域まで視野を広げると、北宋晩期から南宋早期、南宋中期以降（から後半頃）、櫛描文青磁は焼造される中で、時期がくだるにつれて、胎土が緻密なものから粗くざらしたものへと、釉は光沢のあるものからないものへ、水簸は丁寧なものから雑なものへ、焼成技術は一点ずつ正置に焼成したものから大量の重ね焼きへ、文様は煩雑なものから簡単なものへと変遷していくことが指摘されている<sup>〔註33〕</sup>。

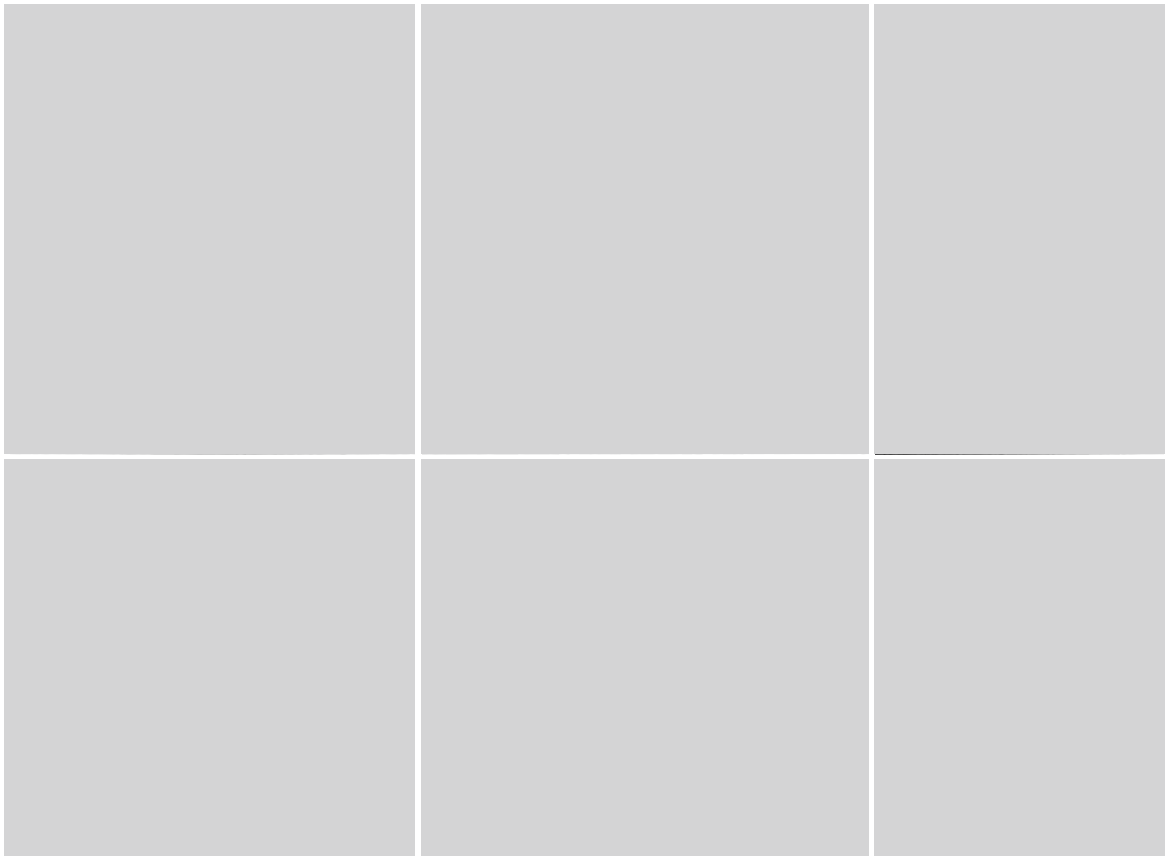


図14 龍泉窯金村地区窯址出土の北宋晩期から南宋早期の櫛描文青磁碗  
 左 14.1 YA3-22TG2 ④ : 7 (北宋晩期二段) / 中 14.2 YA3-22TG2 ④ : 8 (北宋晩期二段) / 右 14.3 YA3-17TG1 ⑤  
 c : 3 (南宋早期)

### 三―二、消費地における出土状況と年代観

櫛描文青磁もしくは青磁劃花文碗・皿(所謂「同安窯系青磁」と称され、先述したように大宰府分類の初期龍泉窯・同安窯Ⅰ類や同安窯系青磁Ⅰ類といった製品が、日本の遺跡から出土している。

福岡・博多遺跡群から出土した中国陶磁器や沈没船資料に着目した田中氏の研究によると、博多遺跡群で出土する櫛描文青磁碗(田中氏は初期龍泉窯青磁の仿製櫛描文碗と称する)は十二世紀以前に遡る可能性があるとしながらも、おおよそは十二世紀代第一四半期(北宋後期から末期)には舶来し始めている可能性が指摘される〔図15〕〔註34〕。数量的には十二世紀第二四半期から龍泉窯や福建産櫛描文青磁が少しずつ見られるようになり、中頃を過ぎると急増し、それが十二世紀第三四半期(南宋早〜前期)の特徴であるとする。基本的にこれらの製品は碗・皿類である。碗は高台の作りなどが比較的丁寧で、胴部から一旦屈折する外反口縁が多く、外面の櫛描文(線条文)はヘラ状工具を使用した太いものが主流である。なおこれらの特徴が「華光礁1号沈船」「Java Sea Wreck」などの沈船から引き揚げられた製品と類似することから十二世紀中頃であろうと考えられている。さらに十二世紀第四四半期から十三世紀第一四半期(南宋中期)にかけては、福建産と龍泉窯青磁が輸入陶磁器の主要商品となる中で、櫛描文青磁の特徴としては、前段階の十二世紀第三四半期(南宋早〜前期)のそれと比較して、直口縁で外面の線条文はより細くなり、内面の文様は通常はヘラ彫りと櫛状工具による「之」字点綴文の組みあわせとなる。田中氏は、これらは閩江下流域の窯の製品の可能性が高いと指摘する。なおこの時期の龍泉窯青磁では、いわゆる初期龍泉窯青磁のタイプは見られない。

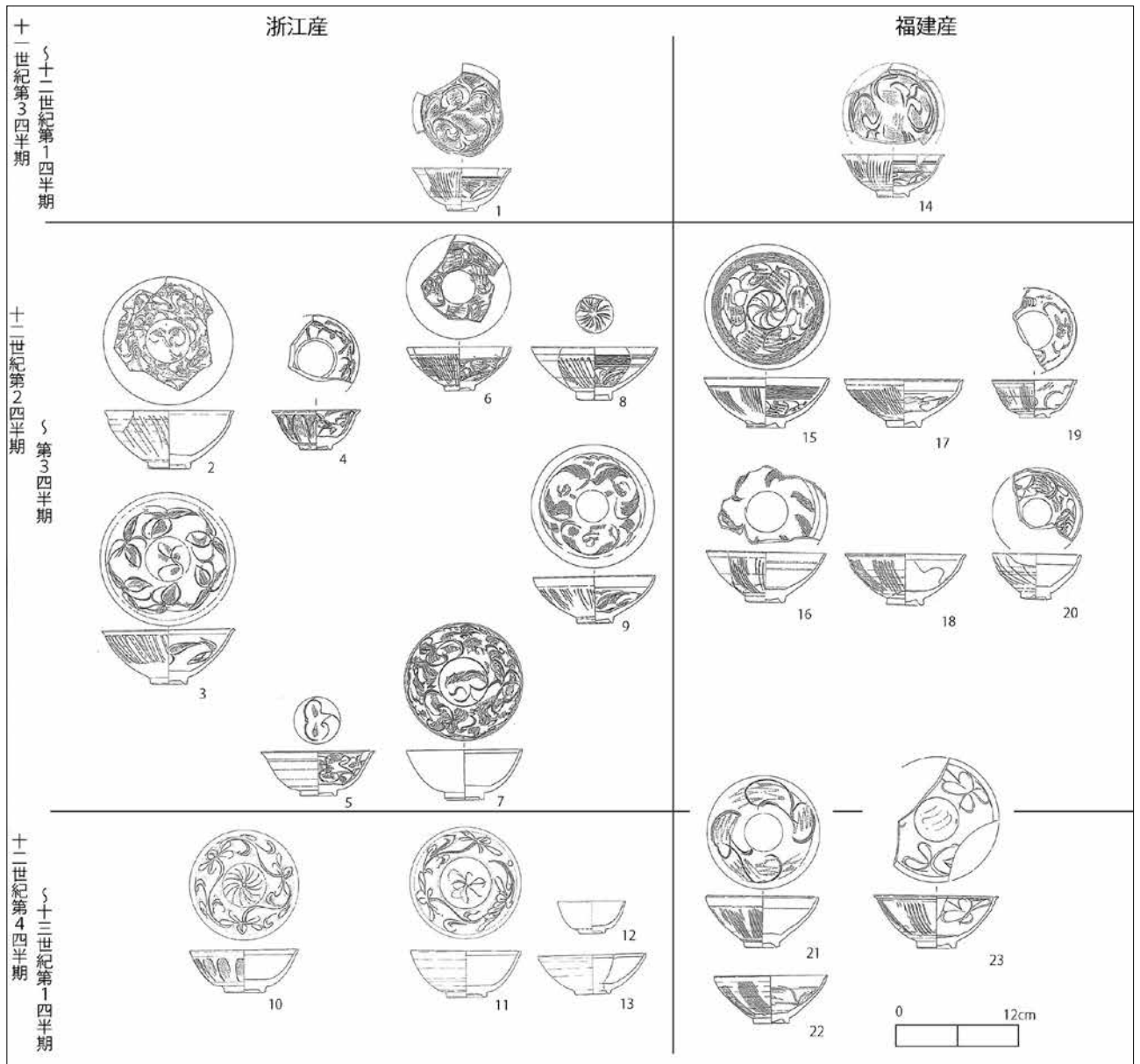


図15 消費地における榭描文青磁碗と龍泉窯青磁碗の出土の様相

三一三、生産地に関して

産地に関して、福建省南部の同安窯址で「伝世品の珠光茶碗」に類似する陶磁片が発見されたことから同安窯系青磁と称されてきたが、実際のところは福建省各地で同様の作例のものは製作されている[図16]。亀井氏はこの産地の問題について器形・成形・調整・施文の点に着目して次のように述べている[註35]。櫛描文青磁の日本の出土例は高台径が四・五〜五・〇センチメートル、一方で同安汀溪窯では、小碗をのぞくと平均値は五・六センチメートルで、五センチメートル以下のものは確認できない。また日本の出土品は高台の削りは時計回りで、起転と終点はずれる粗放なものが多く、高台径が小さい割に深く抉るものが多く兜巾状になり、また畳付の幅が広い。また同安汀溪窯には高台脇まで施釉するものが多いことを指摘する。さらに施文については同安汀溪窯では、外面の櫛描文は一本の幅が太くて短く、内面の櫛目は「之」字型ではなく、平行櫛目文偽「之」字型文が量的に多いとする。

日本の遺跡で出土する櫛描文青磁碗、特に亀井氏のⅡ類―2碗と分類するタイプ[図17]は、十二世紀後半頃(先述した田中氏の編年案のⅢ期十二世紀第4四半期頃から十三世紀第1四半期)に多く見られる。口縁部付近で内湾気味になり、傾斜変換点の内側に沈線をめぐらす。また内底には明瞭な円圈(茶溜まり)が設けられる青磁碗は、同安汀溪窯ではなく、その特徴に近い窯址として同じく福建の莆田莊辺窯がその主な生産地の一つである可能性を指摘する。また森氏も福建各地の窯址出土資料の比較から、日本で出土する所謂同安窯系青磁と共通する特徴が多いのが莆田窯の製品であることを指摘する[註36]。この他、近年、理化学分析を通して日本で出土する櫛描文青磁は同安汀溪窯ではなく、莆田莊辺窯、福

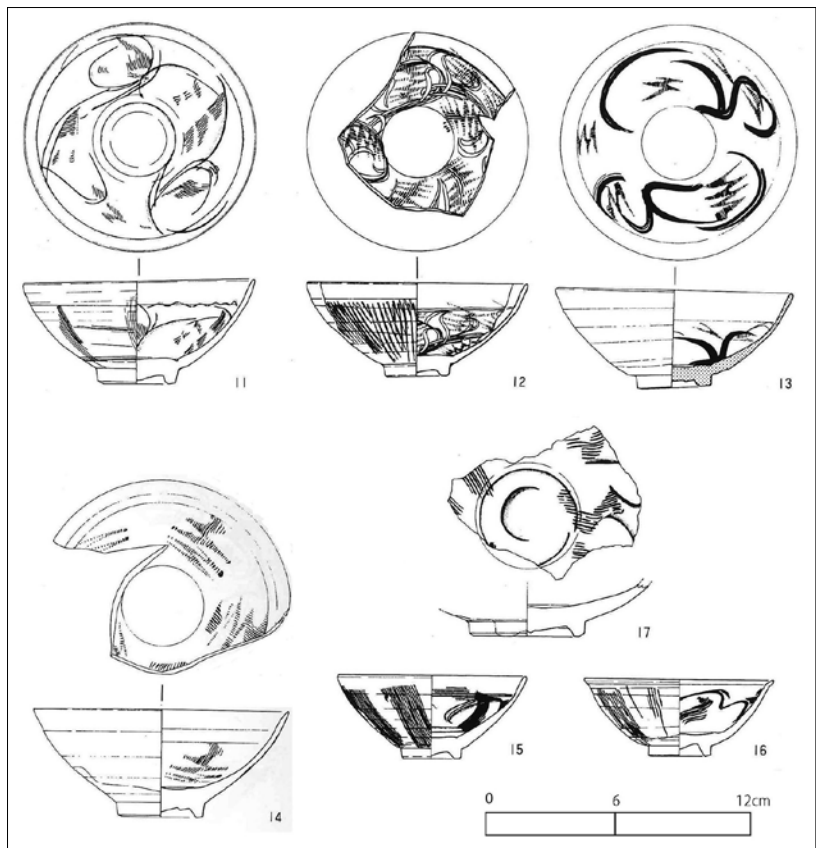


図17 亀井氏の櫛描文青磁の(Ⅱ類-2)に分類された碗

清窯などの可能性が高いことも指摘されている[註37]。

このような観点から、日本で出土するこれらの青磁は同安窯系と称するのは適切でなく、亀井氏や森氏らが指摘するように櫛描文青磁(あるいは櫛目文青磁)など、器の特徴にあわせた名称にした方が良くと考え、本論では極力「同安窯系」という表現は学史や大宰府分類を紹介する時以外は控えている。ところで十一世紀から十二世紀にかけて日本に流通

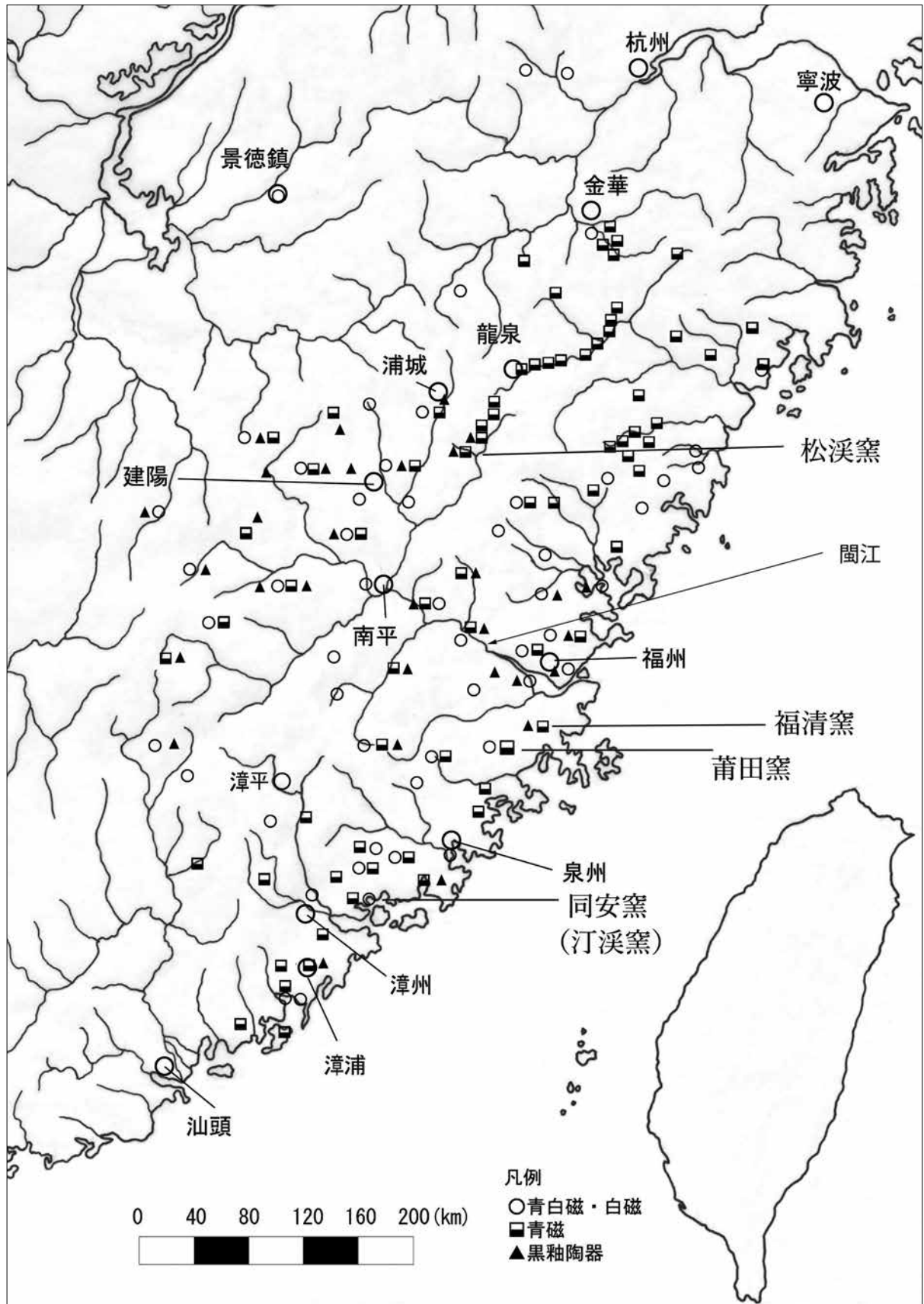


図 16 福建地域の宋元時代の窯址分布図

している福建産の製品、例えば白磁や黒釉碗は閩江流域・周辺に多い。それらの製品は閩江の河口にある福州港から寧波に輸送されている。櫛描文青磁の碗や皿も福建の南に位置する同安窯の製品よりも、福州港に近い莆田窯や福清窯などの製品が、日本に流通している可能性が高い。

### 三一四、小結

本章では、「伝世品の珠光茶碗」（櫛描文青磁碗）の生産年代と生産地について、近年の研究動向を中心に整理した。

「伝世品の珠光茶碗」を多く含む内面に片切彫りなどの刻花による文様と櫛状の点掻文により施文した所謂「櫛描文青磁碗」は、主に十二世紀中頃から十三世紀世紀第一四半期頃まで焼造され、ほぼ同時期に舶来していた。また十二世紀前半頃までは龍泉窯と福建地域で焼造された製品は類似しており、判別が容易ではない。十二世紀中頃になると龍泉窯では所謂「櫛描文青磁碗」の生産量は少なくなっていた一方で、福建地域では粗製化が進みながら数も多く作られており、それらが日本に伝わっている。またそれは閩江あるいはその河口の福州の港に近い地域、例えば莆田窯やあるいは福清窯などの製品が中心である可能性を確認した。また「伝世品の珠光茶碗」は口縁が直口もしくはやや内湾するタイプのものが多いが、「櫛描文青磁碗」にはやや甕口を呈するような口縁部がやや外反するタイプのものも見られる。「伝世品の珠光茶碗」としては「銘 荷葉」がそれに該当する。なお「銘 早苗」に関してはこれらの内湾・直口タイプの櫛描文青磁には類例はない。ただし外面の底部付近が無釉で露胎であるなどの特徴から、龍泉窯の可能性は低く、福建産であると考えられる。

ところでこれら十二世紀後半～十三世紀前半に輸入された櫛描文青磁碗はその後、三〇〇～四〇〇年の十六世紀頃に茶碗として評価された。これまでこの櫛描文青磁碗の一部は、天文から天正年間に登場する珠光茶碗として考えられてきた。その一方で「茶会記」に登場する珠光茶碗と「伝世品の珠光茶碗」は特徴が必ずしも一致しないことも指摘されてきた。この問題について十五世紀後半から十六世紀の同時代に流通していた龍泉窯系青磁碗（上田分類の龍泉窯青磁B類IV）〔註38〕の一部に、「茶会記」に登場する珠光茶碗」と共通するものがある可能性が指摘されている〔註39〕。また謝明良氏はより具体的にその産地についてもいくつか候補を示している〔註40〕。くわえて櫛描文青磁碗の一部（大宰府分類の同安窯系I類など）は、十六世紀代は茶会記の記述にある特徴から「珠光茶碗」ではなく「善好茶碗」と称されていた可能性が高いことが、畑中氏や謝氏により近年提唱されている〔図18〕。

善好茶碗とは、『山上宗二記』によると、武野紹鷗（一五〇二―一五五）と北回道陳（一五〇四―一六二）が所持していた、また当時、宗及（？―一五九一）も所持したようである。それらが同一の茶碗であるかは分からない。天正十四年（一五八六）十二月二十五日の隼人殿の茶会、天正十五年（一五八七）二月十一日の宗及の茶会で、神屋宗湛が「センコウ茶碗」を見ていた。その記載から分かる特徴としては、善好茶碗は磁器で、外面に「カキメ（＝櫛目）七處」あり、内面には雲のような「カキメ七ツ」あり、底部内面には「筋ノ如クカキメニツ」とある。この記述（善好茶碗）に対応するのが現在「伝世品の珠光茶碗」や櫛描文青磁碗の一部が該当するという見解である。また「茶会記」に登場する珠光茶碗」とは、十五世紀後半から十六世紀前半に日本に舶来していた龍泉窯系青磁の中



図 18 畑中氏による龍泉窯青磁碗 B 類Ⅳと珠光茶碗の関係概念図

この■の部分が「茶会記に登場する珠光茶碗」の可能性が想定されている

で外面に細い蓮弁文を有する作例（上田分類龍泉窯青磁 B 類Ⅳ）のうち「福」の文字があり、またおそらく酸火焰気味に焼成され、結果的に醬色となった青磁碗であろうと指摘する「註41」。

筆者は、善好茶碗と称されるタイプの出土品を実見できていないので、その結論については現状では態度を保留しておきたいが、それらの出土品の特徴と茶会記に登場する珠光茶碗が共通していることは非常に興味深い。また所謂「伝世品の珠光茶碗」は偶然発掘・発見されたものが茶碗として取り上げられたことが指摘される一方で、出光美術館が所蔵する珠光青磁茶碗をはじめ、「伝世品の珠光茶碗」には土中に埋まっていたような土鏽の痕跡などが見られないものも少なくない。ある時期からは茶碗として使用され、十六世紀後半以降、茶会記には登場しないものの、廃棄はされず保管されて後世に受け継がれてきた可能性が高い。それはこの榎描文青磁茶碗が以前より茶の湯で重宝され、大切に使用・保管され後世に伝わったとも考えられる。そのように伝わったものの中に善好茶碗として扱われていたからこそ、発掘伝世のような土鏽が見られないような茶碗が伝わったとも考えられる。徳川美術館所蔵の「銘翁」は、元禄二年の蔵帳に記述があるがそこには「珠光」の名が見られない。また寛保三年（一七四三）以降に銘がついた「銘青簾」も、その銘をつけた松山堯山による箱書に珠光（茶碗）の記述は見られない。こうしたことから榎描文青磁碗が天文から天正年間の茶会記に記述される珠光茶碗と称されるタイプの茶碗でなかった可能性も考えられる。ただ本稿では「茶会記に登場する珠光茶碗」の可能性とされる資料の調査が出来てないことから、現段階ではその結論に関しては保留しておきたい。

#### 四、江戸時代後半期に珠光茶碗が再度評価された背景

珠光茶碗は先行研究で指摘されるように、天正十年を最後に茶会記にはしばらく登場しない。その後、明和三年六月十八日以降、川上小白が三回、啐啄齋が一回、吸江齋が二回登場している。その他も含めて、多くが十八世紀の後半になってから表千家系の茶人に限って珠光にまつわるものが使用されるという、極めて興味深い見解が谷氏により示されている〔註42〕。

この視点に関連して、静嘉堂文庫美術館が所蔵する餌籬茶碗を取り上げた「図19」。本茶碗は、口縁部を折り返して玉縁としたやや大振りの平碗である。十一〜十二世紀頃の福建の閩江下流域に所在する閩清窯な

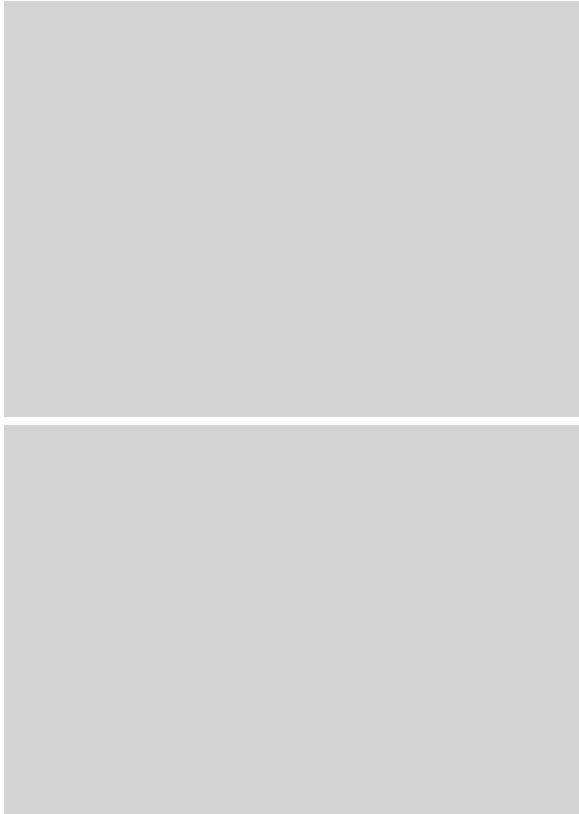


図19 餌籬茶碗 中国 北宋時代 静嘉堂文庫美術館  
高 6.9cm、口径 16.4cm、高台径 7.1cm、重量 416.0g  
(上：姿、下：高台)

どで焼造されたものである。白磁である本碗は、本来灰白色であるが全体に淡い褐色になっている。さらに器全体が茶褐色でもあることから、土中に長い間埋蔵されていたものが、後世に発掘されて茶碗とし見立てられた可能性がある。根津美術館が所蔵する「銘 遅桜」を彷彿とさせる事例である。また本作品には古筆了意による「ゑふこ高麗 茶碗」の極めが添う。その風合いから唐物ではなく高麗茶碗として評価したようである。表千家九代了々齋の書状がつく。この他、樂家七代長入（一七一四―七〇）による本作品を写した茶碗も付随している。

本作品は千利休、功叔（山崎妙喜庵住職）、樗齋、藤村庸軒、梶庵浄馨や前後軒主人（北三井家六代高祐）などの由来があると伝わっている。旧所持者の中に珠光の名称は見られず、また本作品が千利休所持とされる

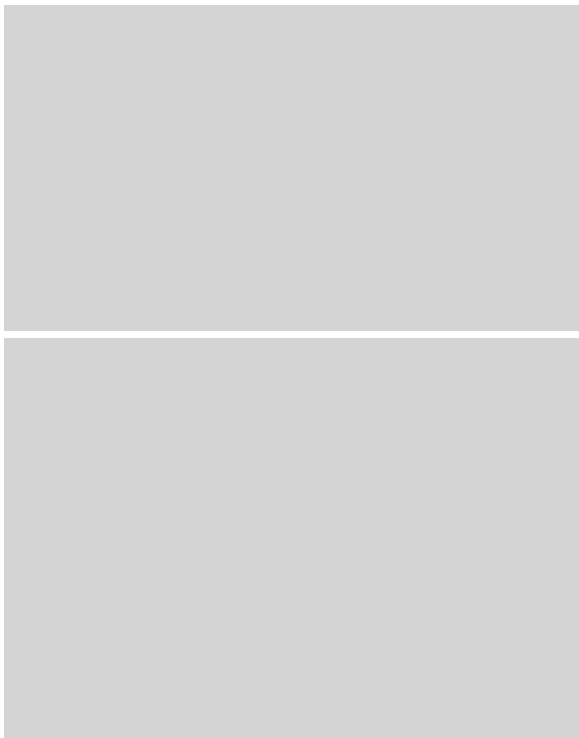


図20 珠光青磁茶碗 銘 微笑  
中国 南宋時代 日本・了入補作 根津美術館  
高 6.6cm、口径 15.8cm、高台径 5.0cm、重量 353.1g  
(上：姿、下：高台)



真偽はさらなる検討が必要であろうが、このような粗製の茶碗を利休やその周辺の茶人と結び付けて考えていたことは、珠光茶碗に見られる動向と共通している可能性が想定できよう〔註43〕。

また根津美術館には、「銘 遅桜」に類似する櫛描文青磁碗で樂家九代了入（一七五六一―一八三四）による補作の碗が知られている〔図20〕。戦前の売立目録にも了入や十代且入（一七九五―一八五四）により茶碗の一部欠損を補作しているものがある（例えば『某伯爵家御所藏品入札』大正十二年六月二十五日「珠光青磁茶盃 了入補 了入箱書付」。『井上侯爵家御所藏品入札』大正十四年十一月九日「珠光茶碗 欠且入補」）。

この他、了入 道入、永楽保全（一七九五―一八五四）、和全（一八二三―一九六）などにより、珠光茶碗の写しが多数作られている。例えば永楽和全作で、北三井家旧蔵・現在三井記念美術館が所蔵する珠光青磁写茶碗（「河濱支流」在印）が知られる。また売立目録や京都国立博物館による『社寺調査報告』から、保全や和全らによる珠光青磁茶碗の写しが多数作られていたことが分かる。これらのことから千家との繋がりを考えるとただ単に珠光茶碗を写した、あるいは中国陶磁を嗜好したというだけではないことが想像される。つまり谷氏が指摘するように、如心齋や川上不白を中心として、千家の茶の湯が、茶祖珠光から武野紹鷗、利休につながる正統派であるということを主張し、その権威付けとして、珠光にまつわる茶道具を嗜好・使用した結果〔註44〕、珠光（青磁）茶碗が江戸時代後半に再び脚光を浴びた背景にあったものと考えることができ

## おわりに

本稿では、江戸時代にはその所在が確認できる（可能性がある作品も含む）「伝世品の珠光茶碗」を中心に、その特徴や出土品との関係、また江戸時代後期にあらためて「珠光茶碗」が注目された背景について、近年の研究動向をまとめ整理を行った。詳細は各小結にまとめたので、ここでは今後の課題として一点作品を紹介しておきたい。

大英博物館に所蔵される珠光茶碗写〔図21〕である。サイズは、高さ六・一センチメートル。器の内面および外面の腰下付近まで、やや緑色を帯びたグレーを呈する釉薬がかけられている。器の内底はしっかりと茶溜りが作られている。器の内壁には細かい刻線で花卉文風の、その上か



図 21 珠光茶碗写 日本 江戸時代 大英博物館 (Franks.1494)  
©The Trustees of the British Museum  
高 6.1cm、口径 13.9cm、高台径 4.6cm、重量 192.0g  
(上：姿、下：高台)

ら櫛状の点掻文というよりも、刺突して表したと思われ「之」字状の点綴文を配している。器の外側面には、縦向きに高台から口縁にかけて櫛描文が一周巡っている。高台裏は、「伝世品の珠光茶碗」が兜金状に粗く仕上げているものとは異なり、比較的丁寧にかつ平坦に整えられている。

この作品は大英博物館の学芸員であったオーガスタス・ウォラストン・フランクス(一八二六―一九七)が日本で蒐集した作品の一つであり、また茶碗の胴下部に貼紙がある。そこには「珠光形京作／時代二百五十年／明治十年五月／蜷川式胤」とある。この貼紙は蜷川式胤(一八三五―一八二)によるものであり、モースコレクションにも同様の貼紙があることが知られている[註5]。そしてその内容から、明治十年(一八七七)段階で、蜷川式胤はこの作品が京都で珠光茶碗を写して作られた焼き物であり、その生産年代が明治十年頃から遡ること二五〇年前、つまり江戸時代の前半頃だったと認識していたことが分かる。

筆者はこの作品が京都で作られたものか、今のところは答えを持ち合わせていない。一方で、これも明確な根拠があるわけではないが、少なくとも江戸時代後期から明治十年以前の間に作られたものであると考えている。本作品には印銘がなく、先に取り上げた薬や永楽によるものとは異なり、江戸時代後期から明治時代初期にかけて「伝世品の珠光茶碗」が千家周辺以外にも広がっていた可能性を物語っている。これらの作品は「伝世品の珠光茶碗」の周辺の茶碗の位置づけであり、体系的な集大成なども行われていない。今後、こういった作品にも注目しながら、珠光茶碗像の歴史的な展開をとらえる必要があると考える。

註1―加藤一九六八、長谷川一九九五a・b、稲垣一九九一、谷二〇〇三、小山雅人二〇一〇、畑中二〇一七、謝明良二〇一九など。

註2―長崎昌斎(久太夫)は「堅手茶碗銘長崎」(現・根津美術館蔵)を所持していたことで知られる。

註3―高橋一九二五、一一九頁。

註4―例えば加藤一九六八、筒井一九八一、稲垣一九九一、谷一九九六・二〇〇三、謝明良二〇一九、三笠二〇二二など。

註5―稲垣一九九二、三〇頁。

註6―谷二〇〇三、六七頁。

註7―畑中二〇一七、一〇五頁。

註8―ここにあげたのは岩屋寺本(天正十六年二月二十七日成立)の記述である。なお、桑山本には次のようにある。

一 珠光茶碗 惣見院殿御代二火二入失申候。

唐物碗也。ヒシヅ(醬)色、ハラメ廿七アリ。從宗易千貫二三好美休へ参候。此類薩摩屋宗祈ヨリ九州へ参候。此外未有二ツ。

なおこの翻刻は筒井氏(筒井二〇二二)が近年改めて行ったものである。

註9―根津美術館一九八五、一九九四、二〇〇二。

註10―西田一九八五、一一〇頁。

註11―根津美術館二〇二二。

註12―筆者は原本を確認できていないが、『雲州藏帳』は写しが行われ、世間に広く流布していく中で、「銘 早苗」に関しては珍しいものであるとの認識はあったようである(加藤一九六八)。

註13―徳川黎明会・徳川美術館二〇一九、図三一・四四。

註14―また亀井氏(一九九五)の分類・編年案によると碗Ⅳ―2類(口縁部がやや外に開く)に類似する。

註15―徳川黎明会・徳川美術館二〇一九、一八九頁。

註16―本願寺に関連する売立目録などには本作品の記載は確認できない。また江戸時代を含むそれ以前の詳細も不明であるが、典型的な櫛描文青磁碗で珠光青磁茶碗としてよく知られる作品なので、本論では寺社関連でかつて所有された作品として取り上げたい。

註17―竹内二〇二三、一六頁。

註18―藤田美術館一九七二。

註19―河原一九八四、口絵。

註20—野村美術館一九九三、二〇〇八など。

註21—茶道資料館二〇一四、図三。

註22—なお近代に入り、京都の寺村家が一時所蔵していたようである。『当市河原町寺村氏所蔵品入札』（大正六年（一九一七）十二月十八日）。

註23—清水一九九六、四六頁。この他、「銘 波瀾」の内箱の箱紐の緑色は、紀州徳川家旧蔵の作品を収納している箱に見られる紐と類似しており、紀州徳川家と関わりがあった作品なのかもしれない。なお同館の清水実氏によると「元文道具帳」には「銘 波瀾」は松屋所持とも記載されていたようである。またもう一点の「珠光青磁茶碗」は「銘 波瀾」とサイズも形態もほぼ類似する作例である（高さ六・四センチメートル、口径一六・〇センチメートル、底径五・三センチメートル、重量三三・〇グラム）。ただ外面に施された櫛描文は口縁部から底部にかけて直線的ではなく、弓状に一六・一八本一組の単位で一週配されている。外面の釉葉がきかれて露胎の部分や内底には土錆と思われるしみが確認できた。また内側面はあえて茶渋（のようなもの）を塗りつけた痕跡も確認できた。箱は三井家により仕立てられたものではないとのことであるが、いずれにせよある段階で三井家が所蔵した作品である。

註24—徳島市徳島城博物館二〇一六、図2。

註25—小山富士夫一九六一、二〇〇頁。田中作太郎一九六一、二六二頁。

註26—小山富士夫一九四三、七六頁。

註27—小山富士夫一九六一、二〇〇頁。

註28—太宰府市教育委員会二〇〇〇。

註29—浙江省文物考古研究所二〇〇五。

註30—平安京では、京都VII期古相（平安京左京八条三坊七町SD24・青磁碗二七八（二八八番）から期新相（平安京左京八条三坊二町GAP19青磁碗一〇三番）といった十二世紀後半から十三世紀半ば頃。また、口径一六センチメートル前後の櫛描文青磁碗が多いようである（小森二〇〇五）。

註31—浙江省文物考古研究所二〇〇五、三九三—四九七頁。

註32—例えばYA3—22から出土した北宋晚期第一段階（356:YA322TG2⑤:7）、また数量的にはさらに増加する北宋晚期第二段階（370—390に見られるYA322TG2④:12、TG③:1など）、また南宋早期（415:YA3—17TG1⑤c:3、421:YA3—17TG⑤d:9など）がある（浙江省文物考古研究所、龍泉青瓷博物館編著二〇一九）。

註33—董健麗二〇一一年、四九九—五〇二頁。

註34—田中克子二〇一九、五五—六六頁。

註35—亀井一九九五、六六・六七頁。

註36—海のシルクロードの出発点、福建、展開催実行委員会二〇〇八、一一八頁。

註37—徳留・平原等二〇一八、八四頁。

註38—上田一九八二、六八・六九頁。

註39—稲垣一九九一、三八頁。畑中二〇一七、一〇三—一〇五頁。

註40—謝明良二〇一九、六六頁。謝氏はこれらの青磁碗は福建省内の窯、例えば華安吉土窯や南靖窯などに茶会記に登場する珠光茶碗の特徴を有するものがあることを指摘している。

註41—畑中二〇一七、一〇三—一〇五頁。

註42—谷二〇〇三、六七頁。また谷氏によると十八世紀後半の茶会記には珠光茶碗の名称はなく、「珠光」「珠光青磁」となっているようである。

註43—徳留二〇二二、四三九頁。

註44—谷二〇〇三、七一頁。

註45—モースコレクションの一部にも蜷川の貼紙ラベルがあることは、梶山博史氏にご教示いただいた。また梶山氏によるとこのラベルにある〇〇年という数字は、蜷川の活躍していた明治時代から約〇〇年前の時代の作品であるという見解を示している可能性があるという。

〔図版出典〕

図1 『大正名器鑑』第六輯より転載。

図3 根津美術館より提供。

図4 逸翁美術館より提供。

図5・6 徳川美術館より提供。

図8 藤田美術館より提供。

図9 野村美術館より提供。

図10 三井記念美術館より提供。

図11・12 ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>) より。

図13・16 筆者作成。  
図14 いずれも浙江省文物考古研究所、龍泉青瓷博物館二〇二二より。  
（図14.1は彩版5-41（365）、図14.2は彩版5-41（366）、図14.3は彩版5-52（415）より転載）

図15 田中克子二〇一九をもとに筆者作成。なお各図の出土地点等の詳細は一九〇

頁に記す。

- 図17 亀井一九九五、図1—4を一部改変。
- 図18 畑中二〇一七、図2に一部加筆。
- 図19 静嘉堂文庫美術館より提供。
- 図20 根津美術館一九八五、一一一頁より転載。
- 図21 大英博物館 ([https://www.britishmuseum.org/collection/object/A\\_Franks-1494](https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_Franks-1494)) より転載。

〔参考文献〕

展覧会図録

- ・『東アジアの海とシルクロードの拠点 福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—』(海のシルクロードの出発点、福建) 展開催実行委員会、二〇〇八年。
  - ・『開館三十周年記念秋季特別展 わび茶の誕生—珠光から利休まで—』(茶道資料館、二〇〇九年)。
  - ・『開館三十五周年記念秋季特別展 茶の湯の名碗』(茶道資料館、二〇一四年)。
  - ・『殿さまとやきもの—尾張徳川家の名品—』(徳川黎明会・徳川美術館、二〇一九年)。
  - ・『板東宗稔と近代徳島の茶の湯』(徳島市立徳島城博物館、二〇一六年)。
  - ・『館蔵茶碗百佳撰』(根津美術館、一九八五年)。
  - ・『館蔵茶碗百撰』(根津美術館、一九九四年)。
  - ・『根津美術館新藏品選 茶の美術』(根津美術館、二〇二二年)。
  - ・『わび茶の成立 珠光・紹鷗』(野村文華財団、一九八九年)。
  - ・『続 野村美術館名品図録』(野村文華財団、一九九三年)。
  - ・『野村美術館名品図録(新版)』(野村文華財団、二〇〇八年)。
  - ・『毛利家伝来の将来品 明・清・李氏朝鮮等の美術』(毛利博物館、一九九〇年)。
  - ・『日本人の愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展』(龍泉窯青磁展開催実行委員会、二〇一二年)。
- 書籍・雑誌
- ・稲垣正宏「二つの珠光茶碗」『関西近世考古学研究』Ⅱ、関西近世考古学研究会、一九九一年、一一—二〇頁。
  - ・上田秀夫「二四—一六世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2、一九八二年、五五—七〇頁。
- ・上田秀夫「龍泉東区RYUN出土青磁碗と日本出土の龍泉窯系青磁碗」『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』国立歴史民俗博物館、二〇〇六年)、一一—二〇頁。
  - ・小森俊寛監修・著「京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、七—十九世紀」(京都編集工房、二〇〇五年)。
  - ・小山雅人「珠光茶碗の虚実」『京都府埋蔵文化財論集』第六集、京都府埋蔵文化財調査センター、二〇一〇年)、三六五—三七六頁。
  - ・小山富士夫「支那青磁史稿」(文中堂、一九四三年)。
  - ・小山富士夫「宋代の青磁」(座右宝刊行会編『世界陶磁全集』第十卷、河出書房新社、一九六一年)、一七六—二〇〇頁。
  - ・岡田章一「特論2 珠光茶碗と珠光青磁」(展覧会図録『兵庫ゆかりの武将たち—明智光秀とその時代—』兵庫県考古博物館、二〇二〇年)、七五—八〇頁。
  - ・加藤義一郎「続・茶碗抄21—珠光青磁」『日本美術工藝』三六〇、一九六八年)、八六—八九頁。
  - ・亀井明徳編著「福建省古窯跡出土陶磁器の研究」(都北印刷出版、一九九五年)。
  - ・河原正彦「(作品解説) 青磁劃花文碗(珠光青磁)」『淡交』第三十八卷第二号、一九八四年)口絵、三九頁。
  - ・熊倉功夫校注『山上宗二記 付茶話指月集』(岩波文庫、二〇〇六年)、三三頁。
  - ・清水実「三井文庫の茶陶(7) 珠光青磁茶碗銘波瀾」『陶説』五百二十三号(一九九六年十月号)、一九九六年)、四四—四七頁。
  - ・謝明良「陶瓷修補術的文化史」(上海書画出版社、二〇一九年)。
  - ・朱伯謙「龍泉窯青瓷」(藝術家出版社、一九九八年)。
  - ・浙江省文物考古研究所編「龍泉東区 窯址発掘報告」(文物出版社、二〇〇五年)。
  - ・浙江省文物考古研究所、龍泉青瓷博物館編著「龍泉金村窯址群 二〇一三—二〇一四年調査試掘報告」(文物出版社、二〇一九年)。
  - ・高橋義雄編「大正名器鑑」(普及版) 第六輯、實雲舎、一九二五年・一九三七年)。
  - ・竹内順一「第三二一回水曜講演会 六古窯—焼き締め陶器と茶の湯—」(『出光美術館報』第百九十五号、二〇二三年)、四—二九頁。
  - ・太宰府市教育委員会編「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—太宰府市の文化財」(太宰府市教育委員会、二〇〇〇年)。
  - ・田中克子「日宋貿易期における博多遺跡群出土中国陶磁器の変遷と流通」(『中近世陶磁器の考古学』第三卷、雄山閣、二〇一六年)、九—一五頁。
  - ・田中克子「博多」にもたらされた中国陶磁器—国内消費地との比較材料として

- ―(岩手大学平泉文化研究センター監修『貿易陶磁器と東アジアの物流 平泉・博多・中国』高志書院、二〇一九年、五一―七八頁。
- ・谷晃「茶会記に見る中国陶磁の受容」(『野村美術館研究紀要』第五期、一九九六年)、三三―四九頁。
- ・谷晃「珠光茶碗について」(『茶道雑誌』六十七卷第三号、二〇〇三年)、六五―七二頁。
- ・田中作太郎「本邦遺蹟出土の宋磁」(座右宝刊行会編『世界陶磁全集』第十卷、河出書房新社、一九六一年)、二六一―二六六頁。
- ・筒井絃一「茶器余聞5―珠光青磁茶碗」(『日本美術工藝』五百十七号、一九八一年)、三三―三七頁。
- ・筒井絃一「山上宗二記」(筒井絃一ほか監修『茶書古典集成』六 利休の茶書、淡交社、二〇二二年)、一〇―一三八頁。
- ・董健麗「論浙江和福建「珠光青磁」」(中国古陶磁学会編『龍泉窯研究』、故宫出版社、二〇一一年)、四九三―五〇四頁。
- ・徳留大輔、平原英俊、桑静、田上勇一郎、栗建安、羊澤林、沈岳明、會澤純雄「ポータル複合X線分析による中世前半期の中国産陶磁器の産地推定に関する研究」(福建・浙江産陶磁器の研究を事例に)、『東洋陶磁』四十八号、東洋陶磁学会、二〇一八年)、七五―九二頁。
- ・徳留大輔責任編集『唐物茶碗』(淡交社、二〇二二年)。
- ・徳留大輔「第四章 江戸時代前期の御成と茶の湯と中国陶磁器」(橋本素子・三笠景子編著『茶の湯の歴史を問い直す―創られた伝説から真実へ』筑摩書房、二〇二二年)、三七―四〇四頁。
- ・ニコル・クーリジ・ルーマニエル「大英博物館所蔵 日本の陶器コレクションの歴史」(『比較日本学研究所研究年報』第四号、二〇〇八年)、一三三―一三九頁。
- ・西田宏子「百碗の周辺」(根津美術館編『館蔵茶碗百撰』根津美術館、一九八五年)、一〇五―一三二頁。
- ・西田宏子「百碗の周辺のその後」(根津美術館編『館蔵茶碗百撰』根津美術館、一九九四年)、一〇一―一二四頁。
- ・長谷川道隆「珠光青磁について(上)―その過去と現在の評価」(『陶説』三百九十号、一九八五年a)、四四―四七頁。
- ・長谷川道隆「珠光青磁について(下)―その過去と現在の評価」(『陶説』三百九十一号、一九八五年b)、一五―二三頁。

所謂「珠光茶碗」に関する一考察― 榎描文青磁を中心に〔徳留大輔〕

- ・畑中英二「二つの珠光茶碗と善好茶碗」(佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』第六卷、雄山閣、二〇一七年)、九一―一〇八頁。
  - ・三笠景子「第二章 茶の湯を創った青磁茶碗」(橋本素子・三笠景子編著『茶の湯の歴史を問い直す―創られた伝説から真実へ』筑摩書房、二〇二二年)、三五―三九六頁。
  - ・藤田美術館編『藤田美術館名品図録』(藤田美術館、一九七二年)。
  - ・彭維斌「試析龍泉窯对同安汀溪窯青磁工艺的影嚮」(中国古陶磁学会編『龍泉窯研究』二〇一一年)、五〇五―五二二頁。
  - ・矢部良明「茶の湯とやきもの」(角川書店、一九九七年)、一三〇頁。
  - ・山田哲也編『茶書古典集成』第三卷『宗及茶湯日記』(天王寺屋会記)他会記(淡交社、二〇二二年)。
  - ・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 型式分類と編年を中心として」(九州歴史資料館研究論集)四、一九七八年、一一―二六頁。
  - ・栗建安「福建出土宋元陶瓷」(『歴史文物』二〇〇三年一期(第百二十四号))、九―二五頁。
  - ・李知宴「珠光青磁(榎目画花文青磁) についての研究浅説」(『中世土器研究』第九号、中世土器研究会、一九八一年)、一―八頁。
- 〔謝辞〕
- 本論をまとめるにあたり、以下の方々に多くのご教示をいただいたとともに資料調査等に際して便宜を図っていただきました。末筆ですが記して感謝申し上げます。(アルファベット表記順・敬称略)
- 新井崇之、バックランド・ロジーナ、降矢哲男、長谷川円、長谷川祥子、堀内秀樹、今井敦、梶山博史、加藤祥平、栗建安、前野絵里、松岡千寿、三笠景子、宮井肖佳、森達也、奥村厚子、沈岳明、清水実、下村奈穂子、田中克子、谷晃、内田昌太郎、王建文、八木春生、山田正樹、羊澤林。
- なお、本研究は科研費 Jp20H01320、Jp19K01105 の成果の一部です。

[図版出典] 図 15 に用いた図版の出典・出土地詳細

No.	産地	出土地点	出典	報告書内図版番号
1	浙江産	1072 号土壤	福岡市教育委員会 1989 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 205：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多』	138 - 64
2	浙江産	1854 号土壤	福岡市教育委員会 1995 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 397：博多遺跡群第 62 次調査の概要 - 博多 48』	81 - 31
3	浙江産	木棺墓 SK - 360	福岡市教育委員会 1996 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 448：博多遺跡群第 62 次調査の概要 - 博多 51』	166 - 696
4	浙江産	V 面 659 号土壤	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 184：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅱ)』	327 - 17
5	浙江産	B 区 54 号土壤	福岡市教育委員会 1986 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 126：高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ』	24 - 5
6	浙江産	649 号土壤	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 184：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅱ)』	195 - 11
7	浙江産	木棺墓 SK - 749	福岡市教育委員会 1991 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 244：博多 16』	263 - 6
8	浙江産	39 号井戸	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 183：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』	32 - 1063
9	浙江産	683 号土壤 (木棺墓)	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 184：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅱ)』	205 - 16
10	浙江産	1 号土壤 (井戸)	福岡市教育委員会 1984 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 105：博多高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』	95 - 18
11	浙江産	1 号土壤 (井戸)	福岡市教育委員会 1984 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 105：博多高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』	92 - 3
12	浙江産	1 号土壤 (井戸)	福岡市教育委員会 1984 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 105：博多高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』	94 - 15
13	浙江産	1 号土壤 (井戸)	福岡市教育委員会 1984 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 105：博多高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』	94 - 17
14	福建産	C-6 区 1 層	福岡市教育委員会 1998 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 557：博多 62』	15 - 5
15	福建産	SR-062 (土壤墓)	福岡市教育委員会 2012 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 1167：原遺跡 14』	37 - 260
16	福建産	祇園町工区 4 号出入口 SK12 (井戸)	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 193：高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』	96 - 76
17	福建産	F 区遺構外	福岡市教育委員会 1987 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 156：博多』	74 - 11
18	福建産	SE-29	福岡市教育委員会 1991 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 247：博多 19』	12 - 7
19	福建産	(その他の出土遺物として報告)	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 184：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅱ)』	327 - 16
20	福建産	H 区遺構外 (包含層)	福岡市教育委員会 1988 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 193：高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』	28 - 1365
21	福建産	SK159 (土壤)	福岡市教育委員会 2009 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 1042：博多 130』	52 - 65
22	福建産	110 号井戸	福岡市教育委員会 1989 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 204：都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅲ)』	289 - 17
23	福建産	SD120 新	福岡市教育委員会 1995 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 396：博多 47』	付編 13 - 356

※図 15 内の番号と本表の番号は対応する。

[附表] 伝世品の青磁茶碗

	作品名	時代	時代(世紀)	高	口径	底径	所蔵	文献
伝世品の珠光(青磁)茶碗	珠光青磁茶碗 銘 早苗	北宋末	12	6.0	12.8	4.7	逸翁美術館	徳留大輔責任編集 2021『茶の湯の茶碗 1 唐物茶碗』淡交社
	珠光青磁茶碗 銘 遅桜	南宋時代	12~13	6.5	15.5	4.3	根津美術館	根津美術館 1985『館蔵茶碗百佳撰』No.9
	珠光青磁茶碗	南宋	12~13	7.0	15.2	5.0	出光美術館	京都国立博物館『日本人の愛した中国陶磁』No.70
	珠光青磁茶碗 銘 初花	南宋	13	5.5	13.0	4.3	野村美術館	野村文華財団 2008『野村美術館名品図録(新版)』No.122
	青磁榴描文碗(珠光茶碗)	南宋	13	6.9	16.4		毛利博物館	毛利博物館 1990『毛利家伝来の将來品一明・清・李氏朝鮮等の美術』図 6
	珠光青磁茶碗	南宋~元	12~13	7.0	16.0	5.0	徳島市徳島城博物館	徳島市立徳島城博物館 2016『板東宗稔と近代徳島の茶の湯』No.2
	珠光青磁茶碗 銘 若楓	南宋	12~13	5.4	13.2	4.1	個人蔵	茶道資料館 2014『開館三十五周年記念秋季特別展 茶の湯の名碗』図 3
	珠光青磁茶碗 銘 波瀾	南宋	12~13	7.0	16.0	5.0	三井記念美術館	茶道資料館 2009『開館三十周年記念秋季特別展 わび茶の誕生一珠光から利休まで』図 39
	青磁劃花文碗	南宋	13	6.7	17.0		称名寺	河原正彦 1984『特集 青磁の世界』『淡交』第 38 巻第 2 号、口絵
	榴描文青磁茶碗(珠光青磁茶碗) 銘 荷葉	南宋	13(後)	6.4	15.6	5.5	徳川美術館	徳川美術館 2019『殿さまとやきもの-尾張徳川家の名品』図版 44
	珠光青磁茶碗 銘 翁	南宋	12	6.7	16.1	5.3	徳川美術館	徳川美術館 2019『殿さまとやきもの-尾張徳川家の名品』図版 31
	珠光青磁茶碗 銘 青簾	南宋	13	5.6	13.0	4.0	藤田美術館	京都国立博物館 1990『特別展覧会 四百年忌 千利休展』図 19
	珠光青磁茶碗	南宋	12~13	7.0	16.6	5.2	東京国立博物館	東京国立博物館(TG-431)
	珠光青磁茶碗	南宋	12~13	6.8	16.3	5.0	東京国立博物館	東京国立博物館(TG-246)
青磁輪花茶碗	青磁輪花茶碗 銘 鏝	南宋	13	6.3	15.4	4.6	マスプロ美術館	東京国立博物館 2016『禪 心をかたち』No.277
	青磁輪花茶碗 銘 馬蝗絆	南宋	13	6.7	15.4	4.5	東京国立博物館	東京国立博物館 2017『茶の湯』図 38、根津美術館『南宋の青磁』図版 35。矢部 1999『唐物茶碗』84・85 頁
	青磁輪花茶碗(1対のうち1)	南宋~元	13~14	5.3	14.9		久能山東照宮	福山城博物館・ふくやま美術館・ふくやま書道美術館 2019『国宝 久能山東照宮-徳川家康と歴代將軍ゆかりの名宝』No.50
	青磁輪花茶碗(1対のうち2)	南宋~元	13~14	5.1	15.2		久能山東照宮	福山城博物館・ふくやま美術館・ふくやま書道美術館 2019『国宝 久能山東照宮-徳川家康と歴代將軍ゆかりの名宝』No.50
青磁蓮弁文碗	青磁蓮弁文碗 銘 満月	南宋~元	13~14	6.3	12.4	3.4	藤田美術館	藤田美術館 1972『藤田美術館名品図録』図 33・34、東京国立博物館 2017『茶の湯』、図 237。サントリー美術館・福岡市美術館 2015『藤田美術館の至宝 国宝曜変天目茶碗と日本の美』No.76
	青磁鎬蓮弁文碗	南宋	13	8.0	12.8		相国寺大光明寺	北海道新聞社 1998『相国寺・金閣・銀閣寺宝展』No.93
	青磁蓮弁文碗	南宋	13	6.9	16.3		高知県立高知城歴史博物館	高知県立高知城歴史博物館 2017『山内家の大名道具』
	青磁鎬茶碗	南宋~元	13~14	6.0	13.3	3.5	石川県立美術館	石川県立美術館 1984『山川美術財団寄贈 茶道美術名品図録』図 72
	青磁蓮弁文茶碗	明	15	7.1	12.1		角屋もてなしの文化美術館	角屋保存会 2013『角屋研究』第 22 号 No.63
	青磁茶碗(青磁蓮弁文碗)	南宋~元	12~13	5.6	13.7	4.2	名古屋博物館	名古屋博物館・NHK 中部ブレイズ 2008『茶人のまなざし 森川如春庵の世界』No.183
	青磁蓮弁文碗	南宋	13	6.9	17.0	4.5	根津美術館	根津美術館 2010『南宋の青磁』図版 32
	青磁蓮弁文碗	南宋	13	6.5	15.4	4.1	円覚寺(山ノ内)	武家の古都・鎌倉 世界遺産登録推進三貴連携特別展企画委員会 神奈川県立歴史博物館 2012『武家の古都・鎌倉』神奈川県立歴史博物館、図 3-3-5-2。三井記念美術館 2019『鎌倉禅林の美 円覚寺の至宝』No.5-3
	青磁筒茶碗(啜啄齋在判)	明時代		8.3	9.8	5.8	三井記念美術館	三井文庫 1991『三井家の表千家道具 1 宗旦から啜啄齋まで』No.73
	青磁蓮弁文碗	南宋	13	6.0	14.8		個人蔵	大阪市立美術館 1997『煎茶・美とのかたち』図 179
	青磁鎬蓮弁文碗	南宋~元	12~13	7.2	16.5		正木美術館	正木美術館 1983『正木美術館出品目録』No.21 茶の美展 P14
人形手茶碗	青磁人形手茶碗	明	15	6.5	13.0	4.4	三井記念美術館	茶道資料館 2009『開館三十周年記念秋季特別展 わび茶の誕生一珠光から利休まで』図 47
	人形手茶碗	明	15~16	7.5	13.6	4.7	個人蔵	根津美術館 1975『中興名物』図 15
	中興名物 青磁人形手茶碗	明	16	6.8	13.0	4.8	藤田美術館	京都国立博物館 1990『特別展覧会 四百年忌 千利休展』図 191。茶道資料館 2013『特別展 少庵四年忌記念 千少庵』図 17、矢部良明『唐物茶碗』91 頁
	青磁人形手茶碗	明		6.9	12.8	4.6	出光美術館	出光美術館 2017『茶の湯のうつわ』
	青磁人形手宝付文茶碗	明	15	6.7	13.6	4.1	香雪美術館	大正名器鑑編纂所 1925『大正名器鑑』第六編。中之島香雪美術館 2018『珠玉の村山コレクション~愛し、守り、伝えた』No.125
	青磁人形手茶碗	明	16	6.9	15.9	5.5	桑山美術館	桑山美術館 2000『桑山美術館所蔵品選』No.78
	人形手宝全文茶碗	明	15~16	6.7	13.6	4.1	香雪美術館	中之島香雪美術館 2018『珠玉の村山コレクション~愛し、守り、伝えた』No.125
青磁人形手茶碗	明	16~17	6.8	12.7	4.7	個人蔵	京都国立博物館『日本人の愛した中国陶磁』No.71	

※図 16 のグラフの縦軸・横軸の値は本表に対応する。

# A Thought on Shukō Tea Bowls

## — Focusing on Celadon Ware with Comb Pattern Decoration

TOKUDOME, Daisuke

*Shukō Chawan* (meaning "Shukō tea bowl," or also known as *Shukō Seiji Chawan* (meaning "Shukō celadon tea bowl")) is a *karamono* (Chinese items) tea bowl expressing the tastes of Shukō (1422/1423–1502) who is praised as the founder of *wabi-cha*. The first appearance of the term *Shukō Chawan* in tea ceremony records is said to be Tenbun 11 (1542) according to *Matsuya Kai-ki* (*Hisamatsu Chakai-ki*). Later, until about the Tenshō period, they appear in tea ceremonies of renowned tea masters such as Takeno Jōō and Sen no Rikyū. However, Shukō tea bowls are also known for the many mysteries. This is because its characteristics described in *Tennō-ji Yakai-ki* (*Sokyū-hoka Kai-ki*) and *Yamanoue Sōji-ki* do not exactly match with those of existing Shukō (celadon) tea bowls. Further, they are undocumented in tea ceremony records after Tenshō 10 (1582) but reappear in Matsudaira Fumai's (1751–1818) *Unshū Kurachō* (Catalogue of the Unshū Storehouse). Interestingly, Fumai's two tea bowls (Known as "Osozakura," Nezu Museum, and "Sanae," Itsuo Museum) were both categorized as *Shukō* type in the *Cha no Bu* (Section of Tea) when *Unshū Kurachō* was edited, although their forms and designs departed from the said type. Because they were mostly unused from the Tenshō period to the latter half of the 18th century, there exists a blank period regarding Shukō tea bowls. It is possible that this accounts for the difference in the understandings of these *chawan* between the former and latter halves of the 18th century. On the other hand, it is notable that there was a revived interest in Shukō tea bowls during the latter half of the 18th century.

This paper re-organizes the studies on Shukō tea bowls and focuses on issues of production location as well as the background on the popularity of Shukō tea bowls during the late Edo period. The paper theorizes on such backgrounds by comparing *seiji* bowl excavated during the contemporary period and those used at tea ceremonies, related antique tea bowls and examples seen from copy sketches of Shukō tea bowls drawn by ceramicists in Kyoto.



出光美術館研究紀要 第二十八号 (二〇三二年度)	二〇三三年三月二十五日	公益財団法人 出光美術館 東京都千代田区丸の内三―一―一 電話〇三―三三―三三―九四〇二	編集 発行 制作 佐藤編集事務所	印刷 東洋美術印刷株式会社
-----------------------------	-------------	---	------------------------	---------------